京都市内遺跡発掘調査概報

平成８年度

京 都 市 文 化 市 民 局

序

京都は，世界に誇れる数多くの歴史遺産に恵まれた大都市であります。市内には多くの埋蔵文化財包蔵地があり，その遺跡は年代ごとに幾層にもわたり積み重ねられた歴史の重みがある複合遺跡であります。

これらの埋蔵文化財は，わが国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり，将来にわたって保存すべきものであります。近年，土木工事等による開発行為は，これら埋蔵文化財保護に少なからず影響を及ぼしております。先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私達は，その開発と保存との調整を適切に行い，これを後世に伝承していく責務があると考えています。

本報告書は，平成８年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の概要報告書であります。調査のうち，試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが行い，発掘調査及び立会調査は，財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託したものであります。

結びにあたりまして，このたびの各調査に御理解と御協力を賜りました市民の皆様を初め，御指導と御助言を賜りました関係の方々に，心から感謝を申し上げますとともに，本報告書を京都の歴史を知るための一助として，お役立ていただければ幸いに存じます。

平成９年３月

京都市文化市民局

局長　溝　郁生

例　　言

1　本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した、文化庁国庫補助事業による平成８年度の京都市内遺跡発掘調査概要報告である。

2　調査地は、下記のとおりである。

　　Ⅰ　鳥羽離宮跡　伏見区竹田浄菩提院町78-2

　　Ⅱ　北野廃寺跡　北区北野紅梅町85

　　Ⅲ　岩倉幡枝古窯跡群(元稲荷窯跡隣接地)　左京区岩倉幡枝町730-6、730-4

3　本書の執筆分担は下記のとおりである。

　　Ⅰ-1　清藤玲子　　Ⅰ-2・3　桜井みどり

　　Ⅰ-4　桜井みどり・清藤玲子

　　Ⅱ-1・2・4　網　伸也　　Ⅱ-3　南　孝雄

　　Ⅲ-1・2・4・5　上村憲章　　Ⅲ-3　上村憲章・鈴木廣司

4　整理作業および本書の作成には、上記執筆者のほか以下の者が参加した。

　真喜志悦子　出口　兼　西大条哲　北原四男　小寺末之

5　写真撮影は、村井伸也、幸明綾子が担当し、遺跡の一部は調査担当者が行った。

6　本書で使用した遺構の略記号は、Ⅲを除き奈良国立文化財研究所の用例に従った。

7　本書で使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

8　測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用し、調査における測量基準点の設置は、辻純一、宮原健吾が行った。本書中で使用した方位および座標の数値は、平面直角座標系Ⅳによる。また、標高はT.P.(東京湾平均海面高度) による。

9　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の京都市都市計画図(縮尺：1/2,500および1/10,000) を複製して調整したものである。

10　本書の編集は鈴木廣司・上村憲章が行った。

本 文 目 次

I　鳥羽離宮跡第140次調査

1　調査経過……1
2　遺　　構……2
3　遺　　物……4
　土 器 類……4
　瓦　　類……5
　そ の 他……7
4　ま と め……7

II　北野廃寺跡第15次調査

1　調査経過……12
2　遺　　構……13
　奈良時代以前の遺構……13
　平安時代の遺構……13
　室町時代の遺構……17
　遺構の変遷……17
3　遺　　物……19
　7世紀代の土器……20
　8世紀代の土器……20
　9世紀代の土器……20
　土器群の様相……22
4　ま と め……22

III　岩倉幡枝古窯跡群（元稲荷窯跡隣接地）

1　遺跡の環境と調査の経緯……25
2　調査経過……28
3　遺　　構……28
　A区の遺構……29
　B区の遺構……31
　C区の遺構……33
4　遺　　物……34
　土 器 類……34
　瓦　　類……36
　土師器窯の一部と推定される構造物……42
5　ま と め……42

図 版 目 次

図版1	遺構	北野廃寺跡第15次調査	調査地配置図
図版2	遺構	北野廃寺跡第15次調査	奈良時代から平安時代遺構平面実測図
図版3	遺構	北野廃寺跡第15次調査	室町時代遺構平面実測図
図版4	遺構	岩倉幡枝古窯跡群 (元稲荷窯跡隣接地)	B区平面・断面実測図
図版5	遺構	鳥羽離宮跡第140次調査	調査区全景（南西から）
図版6	遺構	鳥羽離宮跡第140次調査	1　堀・石垣最下段石列（南西から）
			2　堀・石垣最下段石列（西から）
図版7	遺構	鳥羽離宮跡第140次調査	1　堀・石垣2段目石列（南西から）
			2　石抜き取り溝　SD2（南から）
			3　五輪塔出土状況（北西から）
図版8	遺構	鳥羽離宮跡第140次調査	1　第91次調査　堀・石垣（北東から）
			2　第96次調査　堀・石垣（北西から）
			3　第121次調査　堀・石垣（北から）
図版9	遺構	鳥羽離宮跡第140次調査	1　第122次調査　堀・石垣（南から）
			2　第122次調査　堀・石垣細部（南西から）
図版10	遺物	鳥羽離宮跡第140次調査	出土軒丸瓦、軒平瓦、有段丸瓦
図版11	遺物	鳥羽離宮跡第140次調査	出土有段丸瓦・平瓦
図版12	遺構	北野廃寺跡第15次調査	1　奈良時代から平安時代遺構全景（北から）
			2　SB3（北西から）
			3　SX142（東から）
図版13	遺構	北野廃寺跡第15次調査	1　SB4（北西から）
			2　SB5（西から）
			3　室町時代遺構全景（北東から）
図版14	遺構	岩倉幡枝古窯跡群 (元稲荷窯跡隣接地)	B区全景（北西から）
図版15	遺構	岩倉幡枝古窯跡群 (元稲荷窯跡隣接地)	1　A区　第一面全景（北西から） 2　A区　第二面全景（北から）
図版16	遺構	岩倉幡枝古窯跡群 (元稲荷窯跡隣接地)	1　C区　第一面全景（北東から） 2　C区　第二面全景（北から）

図版17　遺構　岩倉幡枝古窯跡群
（元稲荷窯跡隣接地）

1　A区　第一面土壙1・2・7（西から）
2　B区　土壙14（北から）
3　C区　第一面溝5（北から）
4　C区　第二面溝58（北西から）

挿　図　目　次

図1　調査地位置図……1
図2　調査区北壁断面実測図……2
図3　遺構平面・断面実測図……3
図4　SD1石垣平面・立面実測図……3
図5　土師器実測図……4
図6　軒瓦拓影・実測図……5
図7　平瓦拓影・実測図……6
図8　一石五輪塔実測図……7
図9　白河天皇陵遺構実測図……8
図10　調査地位置図……12
図11　調査区断面実測図……14
図12　SB3カマド平面・断面実測図……15
図13　遺構変遷図……18
図14　SK9出土土器実測図……19
図15　出土土器実測図……21
図16　製塩土器口縁断面実測図……22
図17　調査地周辺遺跡分布図……25
図18　調査地位置図……27
図19　調査区配置図測図……27
図20　A区　第一面平面実測図……28
図21　A区　第二面平面・断面実測図……29
図22　A区　第二面土壙35……31
図23　B区　土壙6……31
図24　C区　第一面平面実測図……32
図25　C区　第二面平面・断面実測図……33
図26　C区　溝58出土土器……34
図27　B区　土壙5出土土器……35
図28　B区　土壙75出土土器……35

図29　C区　溝５出土土器……36
図30　出土軒瓦拓影・実測図……36
図31　C区　溝58出土平瓦拓影１……37
図32　C区　溝58出土平瓦拓影２……38
図33　C区　溝58出土平瓦拓影３……39
図34　C区　溝58出土平瓦拓影４……40
図35　A区　土壙35出土土師器窯の一部と推定される構造物……41

表　目　次

表１　白河天皇陵堀・石垣調査一覧表……９
表２　白河天皇陵関係発掘調査一覧表……９
表３　報告書抄録……44

Ⅰ　鳥羽離宮跡第140次調査

1　調査経過

今回の調査は、伏見区竹田浄菩提院町78-2に所在する倉庫の建て替えに伴って実施したもので、白河天皇陵（成菩提院陵）の南西に位置している。これまでに行われた、第91・96・121・122次調査では、白河天皇陵を画する堀が確認されており、堀からは御陵側に自然石を使用した石垣がみつかっている。この調査成果に基づき、当時の御陵堀の復原が行われている。今回の調査地が復原された堀の西辺に当たることから、堀が南北方向に検出されることが期待できた。

調査区は東西11m、南北10mのほぼ正方形に設定した。調査区を少しでも広く確保するため、残土はすべて場外に搬出することにして、盛土は重機を導入して除去した。

図1　調査地位置図（1：5,000）

調査区東側で御陵堀の石垣を検出した。当初の想定どおり、御陵堀の西辺を検出したことになる。石垣は上段が抜き取られ、下段のみが列をなす状況で残存していた。

2　遺　構

調査地の基本層位は、現代盛土層、耕作土（褐灰色砂泥）層、褐色砂泥層、黄灰色砂泥層、褐灰色砂泥（酸性強）層となる。この下の面で、堀（ＳＤ１）、石垣の石抜き取り溝（ＳＤ２）を検出した。堀の堆積は、上層から灰黄褐色砂泥層、褐色砂泥層、褐灰色砂泥層、灰色泥砂層、黄褐色砂泥層、褐灰色砂泥層、灰色泥砂（やや粘質）層、灰色泥砂層が0.7～0.8mほど堆積していた。ここまでの堆積は、鎌倉・室町時代の遺物を含んでおり、自然流路が形を変えながら流れ、堆積していったものと思われる。この下の堆積層は、堀が機能している間の堆積と考えられる。暗緑灰色砂（粘土混）層、暗緑灰色砂層、黒褐色粘質土（腐植土Ⅰ～Ⅲ）層、灰オリーブ細砂層、暗オリーブ灰色粘土層となる。

堀（ＳＤＩ）　南北方向の溝である。幅約６m、深さ約1.5mを測る。溝の西岸は、素掘りのままであったと考えられるが、自然流路に削平されており西肩口の確認はできなかった。東岸の天皇陵側は、自然石を積み上げて護岸されていた。これまでの調査区と同様に石垣の石は、ほとんど抜き取られていたが、最下段の石列（１段目）と倒れ込んだ２段目の２石を検出することができた。堀の底部中央は、少々窪んでいた。

抜き取り溝（ＳＤ２）　盛土、耕作土層の下で検出した。幅約2.4m、深さ約0.9mの溝である。堆積は、大きく５層に分けられる。褐灰色砂泥（やや酸化）層、灰色泥砂層が２層、オリーブ黒色泥砂層、灰色泥砂層となる。最下層に１段残存していた石列の直上で、天文八年（1538）銘の一石五輪塔を検出した。

石垣　石垣の積み方は、素掘りの溝に河原石や凝灰岩の切石様のものを粘土で固定して土台を作った上に、１段目の石を据え付けている。これは高さの違う自然石を水平に保つための作業であると考えられる。石は長軸を堀に平行にして据え付けているが、一石のみ長軸が縦向きになっ

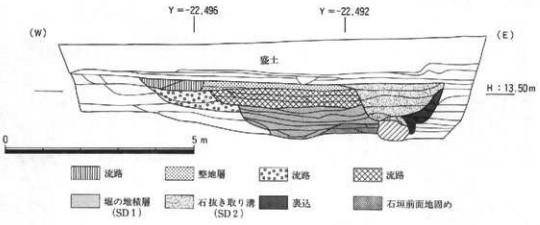


図２　調査区北壁断面実測図

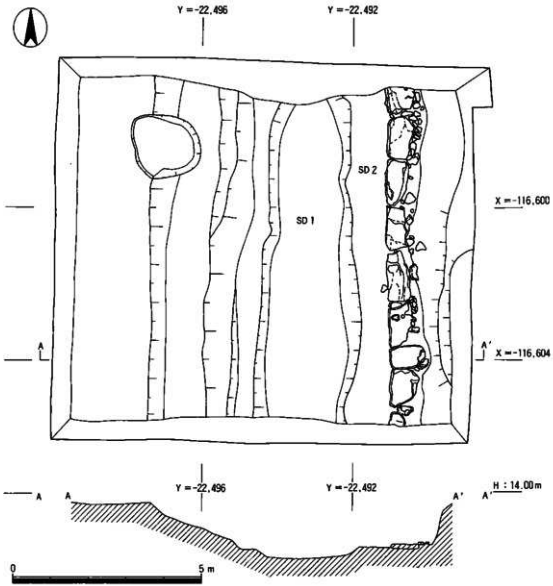


図３　遺構平面・断面実測図

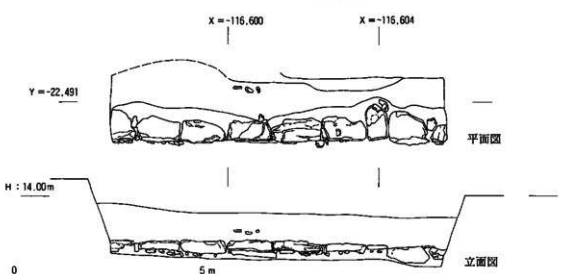


図４　ＳＤ１石垣平面・立面実測図

ている。これはコーナー部が近いために寸法合わせが行われた結果と考えられる。また、この石の南側の石は、一段低くなっている。これは第122次調査で検出した最下段の石列が標高12mと低くなっていたのに寸法を合わせるための作業と考えられる。据え付けた1段目の石の前面は、砂礫と粘土で地固めしており、石が流れ出さないように工夫されている。自然石の種類は、チャート、砂岩、花崗岩などである。石垣の裏込めには、凝灰岩片が使用されていた。

3 遺 物

今回出土した遺物は、整理箱にして12箱であった。これまでの調査では、遺物の出土状況が良好であったので今回の調査でも期待していたが、少量にとどまった。出土遺物の大半を瓦が占めている。土師器・近世陶器・緑釉陶器なども少量出土した。その他には、一石五輪塔・寛永通宝・植物遺体などが出土している。

土器類（図5）

出土量はきわめて少なく、いずれも小片である。平安時代の遺物は、土師器のみであった。中世から近世にかけての遺物は、美濃・信楽・唐津・伊万里などの甕・壺・擂鉢・椀・皿などが出土しているが、なかでも信楽が特に多い。

土師器皿（1）口径9.0cm、高さ1.6cm。平らな底部とやや内湾気味に外方に開く口縁部からなるが、口縁端部は強い2段ナデによって、つまみあげている。調整は、全体的に丁寧である。胎土は、砂粒の混入が少なく密である。色調は灰黄色を呈する。

土師器皿（2）口径10.0cm、高さ1.6cm。口縁の2段ナデは、（1）に比べるとゆるく端部もあまり内傾していない。底部外面の調整は雑である。底部内面のヨコナデと側面の2段ナデの境目が、くっきりと分かれている。胎土は、他の5点と比べると粗く砂粒の混入が目立つ。色調は、によい黄橙色を呈する。

土師器皿（3）口径10.0cm、高さ1.8～2.0cm。口縁部外面の2段ナデと底部の間に、くっきりと段差がつき右巻きにナデあげた痕跡が顕著である。底部外面には、指圧痕が多く残り調整はやや雑である。胎土は、細い石の混入が目立つ。色調は、灰白色を呈する。

土師器皿（4）口径12.8cm、高さ2.3cm（復原高）。口縁部の2段ナデは強くて丁寧であるが、先端部は、あまり内傾せず、やや外反ぎみである。胎土は、砂粒を含むが密である。色調は、によい黄橙色を呈する。

土師器皿（5）口径13.8cm、高さ3.1cm（復原高）。口縁部は、2段ナデを施しているが、ナデは弱めで先端は少し内傾する。調整は、丁寧である。胎土は、砂粒の混入が少なく、なめらかである。色調は、によい黄橙色を呈する。

図5 土師器実測図

土師器皿（6）口径13.0cm、高さ2.7cm

(復原高)。口縁部は、2段ナデを施し、少し内傾する。調整は比較的丁寧である。胎土は、砂粒の混入が多い。色調は、灰黄色を呈する。

瓦　類(図6・7、図版10・11)

出土瓦の大半は、『段瓦』が占めている。この瓦は、三重塔の屋根を葺くために鳥羽の地で操業された瓦窯で、生産されたものである。軒瓦だけでなく、丸・平瓦も作られており、今回の調査においても少数ではあるが出土している。

複弁八弁蓮華文軒丸瓦(1・2)　内区はやや太めの圏線で囲まれ、低く突出している。中房および蓮弁は、上下2段に重ねて表現している。中房上段は花弁状を呈し、1+8の蓮子を配する。蓮弁下段は互いに接しているが、上段は独立している。その上に配した突出した子葉は、中房の下段と接している。外区は外縁の両端に突線が巡り、その中央に珠文を密に配している。丸瓦部凸面は、縦方向にナデる。凹面には、布目が残り段がつく。丸瓦残存部の端には段瓦の特徴である切り込みがわずかに認められる。胎土は砂粒の混入が多く、焼成は良好で堅緻である。(1・2)は、同笵である。

複弁六弁蓮華文軒丸瓦(3)　中房は凸レンズ状を呈し、内区に向かって傾斜する圏線で囲まれている。蓮弁は太い輪郭線で現される。子葉は太い凸線で表現され、中房の圏線に接している。瓦当裏面は指オサエの上をヨコ方向にナデている。焼成は良好で堅緻である。

偏向唐草文軒平瓦(4)　唐草は左から右に転回して行く。外縁は両端がやや盛り上がり、その中央部に小粒の珠文を密に配する。瓦当上端(平瓦凹面)は、ヨコ方向に指ナデする。顎部は、ヨコ方向にナデる。瓦当裏面は、指オサエしている。接合方法は、「包み込み」である。胎土は

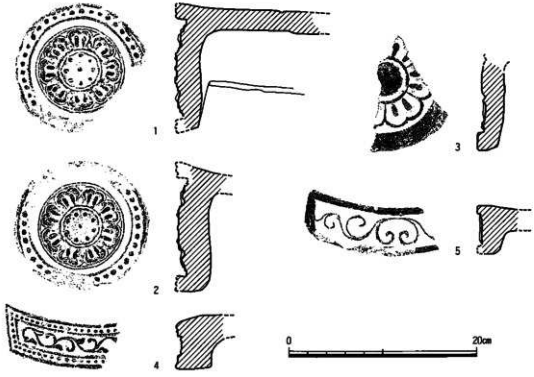


図6　軒瓦拓影・実測図

砂粒の混入が多い。焼成は良好で堅緻である。

均整唐草文軒平瓦（5） 中心に下向きの対向C字形をおき、左右に反転して行く唐草は、中心飾りの上端に接して伸びて行く。顎部、瓦当裏面には、ヨコ方向のナデを施す。焼成は良好で堅緻である。

有段丸瓦（6） 玉縁部のみの出土である。釘穴が設けられているが溝はなく、釘穴の位置もほぼ中心に位置している。胎土はやや大粒の砂粒を含み灰白色を呈する。焼成は良好である。

有段丸瓦（7） 玉縁部分のみの出土であるが、段瓦であると考えられる。3段目の段をつくり出すための切り込みが認められる。釘穴と溝が中心線よりやや右側に寄ったところに設けられている。玉縁の長さは約11.5cmを測る。凸面は丁寧なナデ調整を施す。凹面には、布目痕と前端面の面取りを施している。胎土は砂粒を含み、色調は黄灰白色を呈する。焼成は良好である。

「○」印押捺有段丸瓦（8） 丸瓦部と玉縁の一部のみであるが、端面にわずかに段を作り出すための切り込みが認められる。凹面には、布目痕と前端面の面取り、（糸切り痕）などが認められる。凸面の調整は丁寧なナデである。玉縁と丸瓦部との境目に「○」印の押捺が認められる。胎土は砂粒を含むが密である。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。

有段平瓦（9） 凸面に糸切り、布目の痕跡が認められ、指圧痕が多い。凹面は丁寧なナデを施している。全長39cm、幅23cm、厚さ2.5cm、段差0.7cmを測る。胎土は砂粒を含むが緻密である。色調は黄灰白色を呈し、焼成は良好である。以上の特徴から、第121次調査の際に分類された有段平瓦Ⅳ類型[注1]に分類される。ＳＤ１最下層から出土した。

有段平瓦（10） 凸面にくっきりと布目痕が認められる。凹面には丁寧なナデを施す。段差は約0.7cmを測る。胎土は砂粒を含むが密である。色調は黄灰白色を呈し、焼成は良好である。以上の特徴からⅠ類かと考えられるが、有段部分のみの小片であり、糸切りや縄目叩きの痕跡は、どちらもなく布目痕のみであるため、Ⅱ類である可能性も考えられる。石抜き取り溝（ＳＤ２）より出土した。

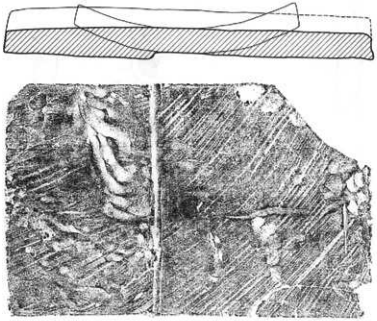


図７　平瓦拓影・実測図

有段平瓦（11） 凹面・凸面共に丁寧なナ

デを施している。胎土は砂粒を含み少々粗めである。段差は約0.7cmを測る。焼成は良好である。以上の特徴からⅢ類に分類される。ＳＤ１から出土した。

「○」印押捺有段平瓦（12）「○」印を押捺した前端部の一部が出土している。凸面には布目痕と縄目叩きの痕跡をとどめ、離れ砂の付着も認められる。凹面には、布目痕の上からナデを施している。胎土は砂粒の混入が目立つ。色調は青灰色を呈する。以上の特徴からⅠ類に分類できる。ＳＤ１の第４層から出土した。

鬼　瓦　破片が一片出土した。牙の部分と思われるが詳細は不明である。胎土は砂粒を多く含みやや粗めである。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

その他（図８）

一石五輪塔　石垣の石抜き取り溝（ＳＤ２）から出土した。五輪塔は抜き取り溝の最下層にあたる石垣の１段目（残存部分）石列の直上で検出した。

地輪に銘を刻む一石五輪塔である。石材は花崗岩で、いわゆる広島・山陽型と呼ばれるもので、黒雲母を多く含んでいる。空風火水地の各輪に「𑖀𑖭𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩」（『キャ　カ　ラ　バ　ア』）の梵字を一字ずつ刻んでいるが、摩滅が激しく鮮明ではない。地輪に刻まれた文字は『天文八年　□祐禅門　二月□二日』と読める。文字は、彫り窪めた中に漆を塗り、その上に金箔を貼って金文字に仕上げている。各輪の梵字には、金箔・漆の痕跡は認められない。五輪塔の高さは、残存高で42.6cmを測る。宝珠の上部が少し欠けているが、本来の大きさをとどめている。

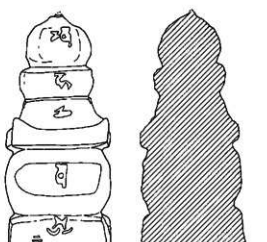


図８　一石五輪塔実測図

４　ま　と　め

今回の調査で、白河天皇陵に関連する調査は、第91・96・121・122次調査と宮内庁書陵部の行った調査を含めて、６次におよぶこととなった。堀の東西南北をそれぞれ調査したことになる。

天仁元年（1108）白河法皇は、自ら東殿に向かい御塔建立の予定地を御覧された。[注2]翌天仁２年（1109）には、当地において三重塔の落慶法要が行われた。[注3]大治４年（1129）に白河法皇は三條鳥丸西第において崩御され、[注4]御骨はいったん香隆寺に移されたが、[注5]生前の遺言によって、天承元年（1131）に御骨は三重塔に収められた。[注6]このときより、この地は白河法皇の陵墓となり、今日に至っている。陵墓を取り囲む堀も、ほぼ同時期に築造されたと考えられる。

これまでの調査結果から、堀の規模は南北55m・東西54mであることが判明した。今回の調査

でも調査前の想定通り、天皇陵を画する堀の西辺を検出することができた。第96・122次の調査結果とあわせると、堀南西隅の特定が可能となった。

堀の石垣は、これまでの調査と同様に御陵側だけに築かれ、外側（西側）は素掘りのままであった。石垣が御陵側のみに築かれたのは、御陵の敷地を隣岸することを目的としていたためであると考えられるが、詳細については明らかにすることができなかった。

石垣の石は、各調査区で長軸を堀に対して平行にしたり、直角にしたりとさまざまである。これは築垣の作業が同時に違う場所から始められたために、寸法合わせを行う必要が生じた結果であると考えられる。また、南辺中央部にあたる第122次調査区では横積みではなく、縦積みの部分があり、この位置に橋があったのではないかと推定されている。石の積み方は、一段ずつ少しずらして階段状に積み上げている。このような石の積み方は、この時期、他に例をみない特異なものであるといえる。

今回の調査では、石垣は最下段のみの検出であった。そのため石垣崩落の危険がないという好

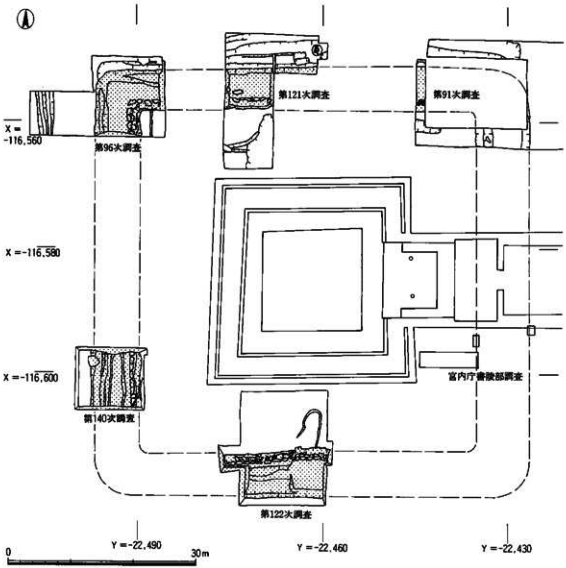


図9　白河天皇陵遺構実測図（1：600）

調査次数	堀の幅 [m]	堀の深さ [m]	段数　積み方	石　　材
第91次調査	8.5～8.7	1.6	3段　横積	
第96次調査	7.1～7.6	1.7	3段　横積	扁平なチャート・花崗岩
第121次調査	5.7～6.0	1.5	4段　横積	
第122次調査	7.0～8.8	1.75～1.9	3段　横積　縦積	花崗岩・チャート・砂岩
第140次調査	6.0	1.5	3段　横積	花崗岩・チャート・砂岩

表1　白河天皇陵堀・石垣調査一覧表

次　数		古墳時代	平安時代後期～鎌倉時代	室町時代後半～近世
第91次調査	遺構		堀、溝、土壙	井戸、土壙、小溝、柱穴、落ち込み
	遺物		瓦（軒瓦）、土師器、須恵器、瓦器 黒色土器、灰釉陶器、土塔、木球 加工木、板材、宝塔片、砥石	土師器、瓦器、須恵器、瀬戸・美濃（灰釉椀・皿・壺）、備前・信楽焼（鉢・甕）、白磁、青磁、染付
第96次調査	遺構		堀	南北小溝、南北溝状遺構、土壙
	遺物	円筒埴輪	瓦（軒瓦・道具瓦）、土師器、瓦器 仏像の一部、木製宝塔、柿経、折敷 漆器	土師器、近世陶器片
第121次調査	遺構		堀、井戸	
	遺物	円筒埴輪 家形埴輪	瓦(軒瓦・有段瓦)、土師器、須恵器 陶磁器、輸入陶磁器、瓦器、天蓋 塔、銅板、刀子、和琴、独楽	土師器、近世陶器片
第122次調査	遺構		堀	
	遺物		瓦(軒瓦・鬼瓦・面戸瓦)、土師器 瓦器、輸入陶磁器（青磁・白磁） 土塔、風招、銅板	土師器、近世陶器片
第140次調査	遺構		堀	
	遺物		瓦（軒瓦・有段瓦・丸瓦・平瓦） 土師器、一石五輪塔	土師器、瓦質土器（火鉢）、美濃（鉄釉皿・天目茶碗）、備前（壺・甕・擂鉢）、唐津（皿・椀）、信楽（甕・擂鉢）、伊万里（皿・椀）、輸入陶磁器（青磁無文椀）

表2　白河天皇陵関係発掘調査一覧表

条件に恵まれたともいえ、石垣の基礎部分まで詳しく調査することができたことは、大きな成果であった。石垣の土台の一部には、石棺と思われる凝灰岩が使われていた。鳥羽離宮内には、墳丘を残す古墳は検出されていないが、田中殿地区で、墓域と考えられる地域が確認されている。方墳、土壙墓、木棺墓、土器棺墓などを検出しているが、方墳は墳丘および内部主体が削平されていたため、棺の構造の特定が困難であった。[註7] しかし、石棺の転用と思われる石材を検出したことから、石棺を持つ古墳の存在した可能性も否定できない。

石の抜き取り溝からは、天文8年銘の一石五輪塔が出土した。天文8年は室町時代後期にあたり、抜き取りが行われたのは、これ以前には遡らないと考えられる。紀年銘によって、石の抜き取りの上限を特定することができたことは、大きな成果であった。これによって今までの調査で報告されてきたとおり、石の抜き取りは、安土・桃山時代の築城に伴う石の需要にこたえたものであろう。石が抜き取られた後、堀は本来の機能を失い陵墓の規模は今の大きさに縮小され江戸時代の初め頃には、堀は完全に埋まっていたと思われる。

調査区西半部、堀の外側では遺構は検出されなかった。堀の西肩は素掘りであったため、中世の流路によって崩されていた。この流路から遺物の出土はほとんどなく、流路から西側では人の住んでいた痕跡も検出できなかったことなど、中世の竹田村西限であった可能性が考えられる。

遺物について、少しまとめておきたい。出土遺物の大半を占めていた段瓦は、側端面に3組の段を有する特殊な瓦である。これは三重塔造営の際、塔の屋根を葺くために、鳥羽の地で生産されたものである。その瓦窯は、田中殿付近であったと推定されている。[註8] また、瓦生産に使用された粘土を採集した痕跡も確認されている。[註9] 段瓦については、第121次調査の際に詳しく報告されているのでここでは省略するが、今回の調査において、「○」印押捺有段丸瓦が出土したことから、平瓦のみでなく丸瓦にも「○」印があったことを確認した。

6次にわたる調査から、白河天皇陵の堀に関しての概要がほぼ明らかになった。これによって、白河天皇陵の規模が、鳥羽・近衛天皇陵と比べても遜色がなかったことを確認することができた。今回は堀西辺の調査であったが、検出した堀がほぼ復原の通りであったことから、この復原が正確なものであったこともあわせて確認できた。ただ石垣の構築工法が特異であり、今回の調査では詳細を明らかにすることができなかった。今後の課題としたい。

最後に、石垣および一石五輪塔の石材の同定に関しては、京都府立山城郷土資料館　橋本清一氏、一石五輪塔の銘文に関しては、山口大学人文学部　橋本義則氏に御教示いただきました。記して、ここに感謝いたします。

註

註1　第122次調査『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和62年度』　京都市文化観光局　1988年
『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和62年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1988年

註2　「中右記」　天仁元年六月三日條
晩法王有御幸鳥羽、（中略）卯時許出御、先御于鳥羽東殿、御覧可被立御塔之所、禁中全無眺望之所、（中略）　其後入御于北殿、

註3　「殿暦」　天仁二年八月十八日條
天晴雨甚降、寅時許院有御幸鳥羽殿、（中略）今日鳥羽御塔供養也、（中略）「今日雨」甚降、雖然必可遂供養也、仍午剋許渡御塔所、

註4　「中右記」　大治四年七月七日條
天晴、巳時許下人来云、（中略）　法王御事大略一定也、（中略）　参入三院御所三條北烏丸西第、（中略）女院、新院、仁和寺大宮、山座主、法印覚猷候御前、此巳時許令崩給了、御年七十七、

註5　「中右記」　大治四年七月十六日條
山陵事、辰刻、仁和寺宮二人以下奉拾御骨、藤宰相長実奉懸御骨、奉送香隆寺、旧臣慮従、治部卿留御墓所、沙汰山陵云々、院御使出雲守経隆参入、鳥羽御塔中可奉収也、是御遺言也、而及明年大将軍在南、仍如往年堀川院御時例、暫可御香隆寺也、及明年御骨可御件寺也、

註6　「百錬抄」　天承元年七月九日條
天承元年七月九日、白河院御骨自香隆寺、奉渡鳥羽殿三重塔、是御平生叡慮也、

註7　第90次調査『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和58年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984年
第93次調査『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和58年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984年
『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和58年度』　京都市文化観光局　1984年

註8　第30次調査『鳥羽離宮跡　国庫補助による発掘調査概要　昭和52年度』　京都市文化観光局　1978年

註9　第104次調査『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和59年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1985年
『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和59年度』　京都市文化観光局　1985年

参考文献（表1）

第91次調査　『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和58年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1985年
『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和59年度』　京都市文化観光局　1985年

第96次調査　『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和58年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984年
『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和58年度』　京都市文化観光局　1984年

第121次調査　『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和61年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1987年
『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和61年度』　京都市文化観光局　1987年

第122次調査　『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和62年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1988年年
『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和62年度』　京都市文化観光局　1988

II　北野廃寺跡第15次調査

1　調査経過

北野廃寺は、1936年７月から行われた市電の敷設工事において、飛鳥時代に遡る多量の古瓦包含層が発見され知られるようになった古代寺院である。[註1] 1965年７月には北野白梅町の交差点北西で、断面観察による調査ではあるが瓦積基壇の一部が発見されており、寺院跡の伽藍の位置が推定できるようになった。[註2] その後、(財)京都市埋蔵文化財研究所が1977年度と1989年度に瓦積基壇の北側で発掘調査を行い（第２次・第14次調査）、被災した礎石建物の基壇とそれに取り付く回廊の痕跡を確認している。検出した建物基壇は北辺と東辺で、東辺の一部には瓦積の痕跡が残っていた。礎石抜き取り穴から東西４間以上、南北２間以上の建物と考えられ、基壇高が低いことから講堂跡と推定されている。[註3]

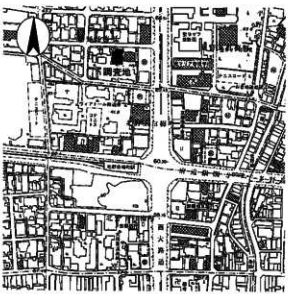


図10　調査位置図（1：5,000）

この地域は以前、紙屋川の氾濫時に礎石が出土したことから野寺跡と考えられていた。[註4] 野寺（常住寺）は『日本後紀』延暦15年（796）11月条に七大寺とともに新銭を施されたのを文献上の初見とする官寺である。福山敏男氏は『政事要略』や『七大寺巡礼私記』などの分析から、野寺の位置を一条大路の北京外で紙屋川の西方にあてている。[註5] 野寺の位置については、1979年度に行われた第６次調査で「野寺」銘の墨書土器が出土したことから、北野廃寺に相当することが判明した。[註6] しかし、北野廃寺の創建年代は出土瓦の考察から７世紀前半に遡るものであり、広隆寺の移建問題も含めて不明な点が多い。[註7]

今回の調査地点は、第２次調査で検出した瓦積建物基壇の北側に位置し、寺院経営に関わる遺構の検出が期待できた。発掘調査の事前に試掘調査を行ったところ、古代から中世にかけての遺構面が良好に遺存していることが判明したため、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は1996年10月21日より開始し、同年11月22日にすべての作業を終了した。調査した遺構面は、大きく中世と古代の遺構面にわかれる。上層の中世の遺構面では、布掘り掘形に小礎石を並べた塀跡と建物跡の一部を検出している。時期的には15世紀後半のもので、寺院廃絶後の屋敷跡と考えられる。また下層では、掘立柱建物を中心とする７世紀から９世紀にかけての多くの遺構を検出している。これら下層の遺構は、北野廃寺（野寺）に関係する遺構群である。

2　遺　構

調査地は南に緩く傾斜しており、北側で地表下0.3m、南側で0.5mの厚さをもつ近世・近代の盛土を除去することによって中世の遺構面となる。この遺構面は、固く締まった黒褐色砂泥層を基盤としており、中世の遺構の埋土は褐灰色砂泥層と明確に検出することができた。この黒褐色砂泥層は調査区全域にわたって厚さ0.1mほど堆積しており、古代の遺構面は北側ではこの下層で検出できる。また調査区の南側では２～３層の層位をもって遺構を検出した。これら古代の遺物包含層は0.2～0.3mの厚さをもっており、その下層が地山の砂礫層となる（図11）。ここでは、奈良時代以前の遺構・平安時代の遺構・室町時代の遺構にわけて概説を行う。

奈良時代以前の遺構（図版２）

奈良時代以前と考えられる遺構は、竪穴住居１棟・掘立柱建物２棟・南北溝１条である。

ＳＩ42　調査区南西隅で検出した竪穴住居跡である。大半が調査区外となるため規模は不明であるが、北に対して西に10°ほど振っている。東辺にカマドを持つが火床しか残っておらず、床面も検出面から深さ0.1mほどで、かなりの削平を受けていると考えられる。カマドの火床から土師器甕と瓦片が出土している。

ＳＢ１　調査区西半で検出した南北５間（8.7m）×東西２間（4.8m）の南北棟の掘立柱建物である。北に対して西に１°ほど振っている。南北の柱間は１間だけが1.5m（５尺）で、他の柱間は1.8m（６尺）となる。東西柱間は2.4m（８尺）等間を意識しているが、若干のズレが認められる。柱掘形は0.6～0.7m前後の隅丸方形で柱は直径0.2mほどである。柱掘形から出土する土器は土師器甕の小片がほとんどであるが、ｂ手法と考えられる土師器杯底部片が出土しており、８世紀中頃の年代が与えられる。

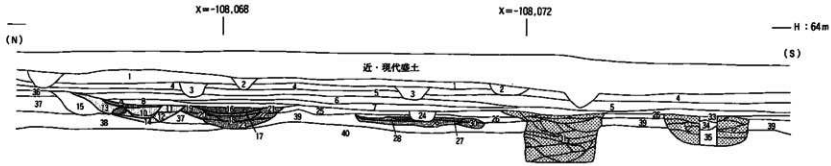
ＳＢ２　調査区南で検出した南北３間以上×東西１間（3.9m）の南北棟の掘立柱建物である。建物の振れは、ＳＢ１とほぼ等しい。東西柱間は13尺となるが、南北の柱間は1.5m（５尺）前後で、等間にならず乱れている。柱掘形は0.5m前後の隅丸方形で、柱は直径0.2mほどである。柱の切り合い関係から、ＳＢ１よりも新しいことがわかる。

ＳＤ150　調査区東端で検出した幅２mほどの南北溝である。ＳＢ１・ＳＢ２と同じように、若干西に振っている。深さは北側の深いところで0.4～0.5m、南側は削平を受けており0.2～0.3mである。調査区内では北端で途切れているが、東へ屈曲している可能性もある。出土土器には、ｂ手法で内面に暗文を持つ土師器杯が多く出土しており、ＳＢ１と同じく８世紀中頃の特徴を示している。

平安時代の遺構（図版２）

平安時代の遺構は掘立柱建物５棟および単独の掘立柱穴１基、土壙１基である。

ＳＢ３　調査区東端で検出したカマドを伴う掘立柱建物である。柱列を５間分検出しており、柱間は中央が2.7m（９尺）で両脇２間が2.1m（７尺）等間である。柱掘形は0.6m前後の隅丸方形で、柱は直径0.2mほどである。柱列は北に対して西に４°ほど振っており、建物としては東

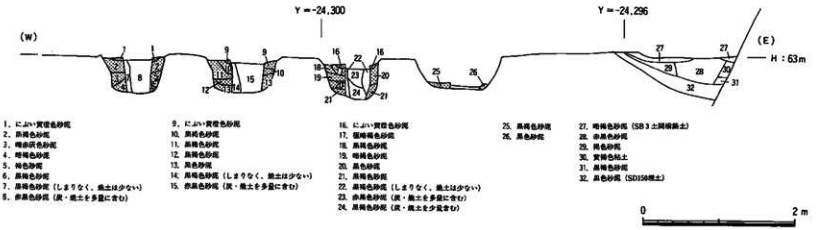


1. 暗褐色砂質（近世耕土）
2. 灰黄褐色砂質（耕作層）
3. 暗褐色砂質
4. 黒褐色砂質（鎌倉時代包含層）
5. 黒褐色砂質（平安時代後期以降の包含層）
6. 黒褐色砂質
7. 黒色砂質 } 平安時代後期～中期の包含層
8. 暗褐色砂質
9. 赤褐色砂質（地土風） } SX140
10. オリーブ褐色粘土

11. 暗褐色砂質
12. 黒褐色砂質 } SX140
13. 褐灰色砂質
14. 黒褐色砂質
15. 暗褐色砂質
16. 明赤褐色砂質（地土風）
17. 暗褐色砂質
18. 黄褐色粘土 } SX141
19. 黒褐色砂質
20. 黒色泥土

21. 褐色砂質 } SX141
22. 黒褐色砂質
23. 黒褐色砂質
24. 黒褐色砂質
25. 黒褐色砂質（炭を多く含む）
26. 暗褐色砂質
27. 極暗褐色砂質
28. 黄褐色砂質
29. 黒色砂質（炭を多量に含む） } SX143
30. 黄褐色砂質

31. 明黄褐色砂質と黒褐色砂質の版築
32. 暗褐色砂質と黒褐色砂質の版築
33. 黒褐色砂質（炭を多く含む）
34. 極暗褐色砂質（炭・焼土を多量に含む） } SB 4 柱穴
35. 黒褐色砂質（炭・焼土を多量に含む）
36. 暗褐色砂質（SB 3 土間敷土）
37. 黒褐色砂質
38. 黒色砂質 } SD150埋土
39. 暗褐色砂質
40. 褐色砂質（地山）



1. にぶい黄褐色砂質
2. 黒褐色砂質
3. 暗赤灰色砂質
4. 暗褐色砂質
5. 褐色砂質
6. 黒褐色砂質
7. 黒褐色砂質（しまりなく、焼土は少ない）
8. 赤黒色砂質（炭・焼土を多量に含む）

9. にぶい黄褐色砂質
10. 黒褐色砂質
11. 黒褐色砂質
12. 黒褐色砂質
13. 黒色砂質
14. 黒褐色砂質（しまりなく、焼土は少ない）
15. 赤黒色砂質（炭・焼土を多量に含む）

16. にぶい黄褐色砂質
17. 極暗褐色砂質
18. 黒褐色砂質
19. 暗褐色砂質
20. 黒色砂質
21. 黒褐色砂質
22. 黒褐色砂質（しまりなく、焼土は少ない）
23. 赤黒色砂質（炭・焼土を多量に含む）
24. 黒褐色砂質（炭・焼土を少量含む）

25. 黒褐色砂質
26. 黒色砂質

27. 暗褐色砂質（SB 3 土間敷敷土）
28. 赤黒色砂質
29. 褐色砂質
30. 黄褐色粘土
31. 黒褐色砂質
32. 黒色砂質（SD150埋土）

図11　調査区断面実測図

東壁断面実測図（上）、ＳＢ５南妻柱・ＳＤ150断面実測図（下）

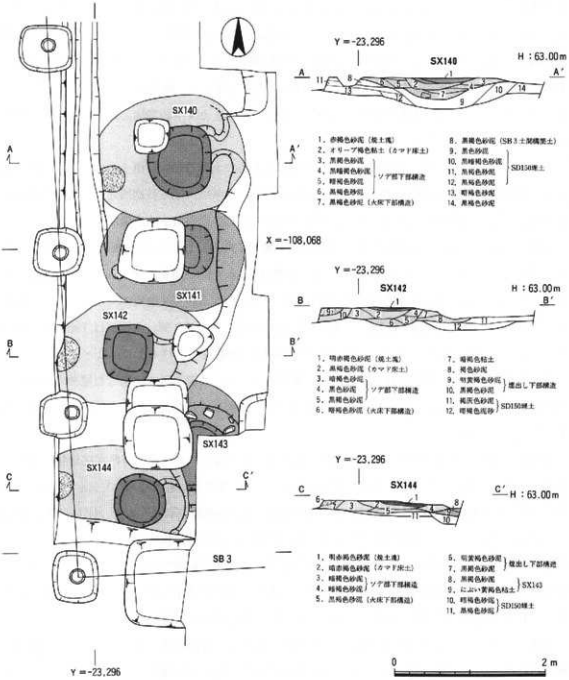


図12　ＳＢ３カマド平面・断面実測図

の調査区外に展開し、南北棟になると考えられる。

建物に付属するカマドは、建物の南半に南北に並んでいる（図12）。新旧２時期あり、旧段階には２基のカマド（ＳＸ141・143）が、新段階では３基のカマド（ＳＸ140・142・144）が構築されている。とくに新段階の３基のカマドは建物の柱間に対応しており、ＳＸ140は中央柱間、ＳＸ142とＳＸ144はその南２間にあわせている。また、カマドの東側は焚口のためか一段低くなっている。

次にカマドの構築方法であるが、下層にＳＤ150があるため東西２ｍ・南北1.5mほどの楕円形の掘り込みを行い、黒褐色砂泥で基盤をつくり、暗褐色粘質砂泥で周囲を固めてから中央部に粘

土で火床を作るのが一般的である。火床は直径0.6～0.7mほどで、明赤褐色の焼土が充満していた。また、火床に対応して西側の柱筋部分に、直径0.3～0.5mの円形を呈する窪みがあり、明黄褐色砂泥で埋められていた。煙出しに関連する下部構造と推定できるが、具体的な性格は不明である。なお、カマド群の北側であるが、ＳＤ150の窪みを埋めて、建物内を土間状に整地している。これらのことから、南北棟建物の北半を土間に、南半をカマドの空間として利用していた状況を復原することができよう。

ＳＢ３の年代であるが、カマド直上や柱穴からｃ手法の土師器杯片が出土している。また、柱穴の一部に建て替えの痕跡が認められ、９世紀前半から中頃にかけて長期間使用されていた可能性がある。なお、特筆すべき点として、製塩土器片がＳＢ３の周辺から多量に出土している。

ＳＢ４　調査区南東で検出した南北４間以上×東西２間（5.1m）の南北棟の掘立柱建物である。北に対して西に４°ほど振っている。南北柱間は2.1m（７尺）等間で、東西柱間は2.55m（８尺半）等間となる。北から３間目には、間仕切りと考えられる柱を２箇所で検出した。この間仕切りの柱間は1.5m（５尺）・2.1m（７尺）・1.5m（５尺）となる。側柱の掘形は１m前後の隅丸方形で柱も直径0.24mほどある。間仕切り柱は掘形0.5m前後で、柱も0.15mほどで小さい。柱掘形は黒褐色砂泥層と黄褐色粘土層を互層に築固めており、当調査区で検出した建物の中では大型の建物といえる。なお、柱穴には多量の焼土と炭が充満しており、後述するＳＢ５と同時に被災したと考えられる。

ＳＢ５　調査区北端で検出した南北２間（4.2m）×東西３間（4.35m）の掘立柱建物である。建物の振れはＳＢ４と等しい。南北柱間は2.1m（７尺）等間で、東西柱間は1.5m（５尺）・1.35m（４尺半）・1.5m（５尺）となる。柱の掘形は１～1.3m前後の隅丸方形で、柱も直径0.4mほどと非常に大型である。掘形埋土は柱を巻くように築固めており、柱穴には柱を抜き取った際の崩れた土が少量流れ込み、さらに多量の焼土と炭を含む赤褐色砂泥で埋めた様子が観察できる。柱穴から平安京Ⅱ期中段階の土師器皿が出土しており、９世紀後半に建てられたことが推定できる。ＳＢ４と同時に被災しており、ＳＢ４とともに一時期を画した建物である。

ＳＢ６　調査区中央で検出した南北３間（6.5～6.8m）×東西２間（4.2～4.5m）の南北棟の掘立柱建物である。北に対して東に２°ほど振っている。南北の柱間は２m前後で、柱間がそろっていない。東西柱間も北妻では2.1m（７尺）等間を意識しているが、南妻ではかなりのズレが認められる。柱掘形は0.5m前後の隅丸方形で、柱は直径0.2mほどである。

ＳＢ７　調査区南東で検出した南北３間（5.2m）×東西２間以上の東西棟の掘立柱建物である。ＳＢ６と同じく北に対して東に２°ほど振っている。建物の西妻部を検出したのみで削平も激しいため詳細は不明であるが、北側２間は母屋で南に庇がつくようである。母屋の西妻２間は等間とはいえないが長さは3.4mで、庇の出は1.8m（６尺）に復原できる。東西柱間は1.8m（６尺）であろう。柱掘形は0.5m前後の隅丸方形で、柱は直径0.2mほどである。

ＳＫ88　ＳＢ４の北西隅柱のすぐ西隣で検出した大型の掘立柱である。掘形は約１mの隅丸方形で、直径0.3mほどの柱穴をもつ。深さも0.8mと深く、柱の抜き取り穴に完形の土師器甕を廃

楽していたため、その下が一部空洞になっていた。単独で検出したため性格は不明である。なお、出土した土師器皿から９世紀後半の年代が与えられるが、被災痕跡は認められない。

ＳＫ112　調査区北東隅で検出した不定形の土壙である。ＳＢ３に伴う北側の土間部あるいは北西隅柱を切っており、ＳＢ３より明らかに新しい。出土土器も９世紀後半から10世紀初頭の土師器皿を多く含んでいた。西側のＳＢ５との関係は、間に中世の攪乱があるため明らかでないが、焼土を含んでいないためＳＢ５が被災した後のものと考えられる。

室町時代の遺構（図版３）

中世の遺構は、室町時代の遺構だけである。各遺構の出土遺物にはほとんど時期差がなく、15世紀後半の年代が与えられる。検出した遺構は、建物の一部と考えられる柱穴、土壙１基、屋敷を区切る塀、柵列である。

ＳＢ８　調査区西端で東西に並ぶ柱穴を２基検出した。柱間は2.8mで、西側の柱穴には小礫石が底に据えられていた。南北への展開は不明だが、北側が高く削平を受けていることを考慮すれば、北側に展開する建物の南東隅になる可能性が高い。

ＳＫ９　ＳＢ８の東柱穴のすぐ東で検出した、直径0.8m前後、深さ0.4mほどの土壙である。土壙内には拳大の礫が充満しており、礫の間に土師器皿が多く廃棄されていた。

ＳＡ10・11・12　屋敷の南東隅を区画する塀である。幅・深さ共に0.2mほどの布掘り掘形を穿ち、柱部分に小礫石を柱間１m前後で据える。ＳＡ10は調査区北端から南北に延び、Ｘ＝－108,066ライン上で若干鉤状に布掘り掘形が曲がり途切れる。小礫石は掘形底より高い位置に据えられているが、南端の小礫石だけは底部よりさらに0.1mほど壺掘りして据えられている。また、布掘り掘形が途切れた部分も深く壺掘りされていたが、小礫石は検出できなかった。ＳＡ11は、ＳＡ10に対応して布掘り掘形が鉤状に曲がり、Ｙ＝－24,301ラインを南北に延びる塀である。調査区南端で西に曲がり、ＳＡ12となる。小礫石は布掘り掘形に対応せず、若干西によせて柱穴を壺掘りしている。ＳＡ10の南端柱穴に対応するＳＡ11の北端柱穴は、やはり他の柱穴より深く掘られており、底に小礫石が据えられていた。また、この対応する柱穴の間には、浅く小さな柱穴に小さな石が据えられていた。この部分は屋敷へ入るための簡易な門になる可能性が高い。ＳＡ12はＳＡ11から西に曲がって調査区南端を東西に走る塀である。攪乱が多く小礫石の残りはよくないが、ＳＡ11に対応して柱穴を布掘り掘形の北側によせて壺掘りしている。

ＳＡ13　ＳＡ10の布掘り掘形の西側に接して設けられた掘立柱柵列である。柱穴は交互にずれており、時期差があるのかもしれない。しかし、ＳＡ10の布掘り掘形が鉤状に途切れた部分にある柱穴から北に延びているようで、ＳＡ10に伴う何らかの構造物である可能性もある。

遺構の変遷（図13）

最後に今回の調査で検出した遺構群について、奈良時代以前の遺構を第Ⅰ期、平安時代の遺構を第Ⅱ期、室町時代の遺構を第Ⅲ期として時期的な変遷を考えてみたい。

奈良時代以前の第Ⅰ期は、３期に小区分できる。第Ⅰ－ａ期は、竪穴住居が営まれた時期である。今回の調査ではＳＩ42が１棟検出できただけであったが、当調査地の北東で行われた第10次

調査では瓦片が出土する竪穴住居跡を3棟検出している。ＳＩ42のカマドからも瓦片が出土しており、7世紀段階ではこの周辺にはまだ竪穴住居が営まれていた。[註8]

第Ｉ－ｂ・ｃ期は、南北溝ＳＤ150で区画し、南北棟ＳＢ１・２が建てられる時期である。出土土器から8世紀中頃に比定できる。第10次調査の所見では、8世紀には寺院地の北限が定められるようになる。当調査地は第2次調査などで検出した瓦積基壇建物の北に位置しており、性格は不明であるが寺域北辺において寺院経営に関わる建物が建てられるようになったことを示している。

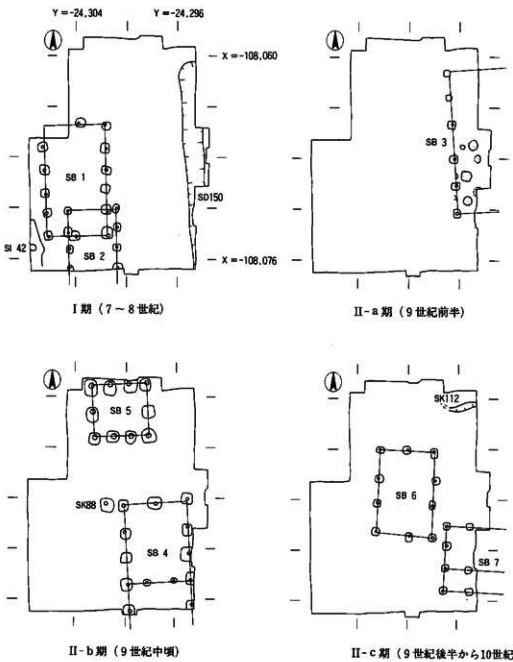


図13　遺構変遷図（1：300）

第Ⅱ期の遺構は、平安遷都直後に建てられた野寺（常住寺）に関わる遺構である。第Ⅰ期と同じく３期に小区分できる。第Ⅱ－ａ期は、カマド群を伴うＳＢ３が建てられた時期である。カマド面直上の土器片や柱穴から出土した土師器皿から、平安遷都後でも早い段階に建立され、９世紀前半にわたり使用された施設であることがわかる。

第Ⅱ－ｂ期は、ＳＢ４・５が建立された時期である。掘形から出土した土器から、９世紀第３四半期に整備された建物群である。これらの建物は同時に被災していることから、その下限を知ることができる。『日本三代実録』によれば、元慶８年（884）３月15日に常住寺の塔に落雷があり、五重塔から講堂・金堂・鐘楼・経蔵・歩廊・中門と延焼し、伽藍は一時にして灰燼に帰してしまった。火災は中心伽藍だけでなく寺院地全体に及んだようで、ＳＢ４・５の火災痕跡はこの時のものと考えられよう。

第Ⅱ－ｃ期は、元慶８年の火災後にＳＢ６・７が建てられた時期である。以前の建物の方位がすべて西に振っているのに対し、この建物群は東に振っている。建てられた時期は断定できないが、ＳＫ112がこれらの建物と並行するならば10世紀初頭に比定することができる。文献史料でも『本朝世紀』天慶元年（938）７月３日に仁王経読経を宣下された諸寺諸社のうちに常住寺がみえるのを最後に、平安時代の文献にみえなくなる。常住寺自体は室町時代まで存続するが、周辺地域における発掘調査の所見では、10世紀後半以降は検出遺構も少なく、寺域の縮小衰退していったことが予測できよう。

第Ⅲ期は、15世紀後半の屋敷跡である。屋敷の南東隅部の塀跡と建物の一部を検出した。北野廃寺周辺では、今までの発掘調査で建物跡を中心とした室町時代の遺構を多く検出しており、北野遺跡として認識されている。常住寺に関する文献史料は、明応９年（1500）の御誦経七ケ寺にみえるが最後であるが、寺院地自体は平安時代よりかなり小さくなっていたと考えられ、周辺に多くの屋敷が建てられたのであろう。

3　遺　物

出土した遺物は整理箱で18箱ほどである。時期別にみると９世紀代の遺物がその大半を占め、次いで８世紀、15世紀の遺物となり、７世紀代の遺物はきわめて少ない。また種類別では、瓦類は少なく凸面に格子叩きを持つ平瓦が若干量出土する程度である。土器類は細片が多く、図化できるものは少ないが、その中で多量の製塩土器と甕など煮沸具の出土が特徴的である。遺物はこの他に鉄滓等が小量出土している。ここでは、北野廃寺に伴う遺物の概略を行う。なお、15世紀の遺物は図14にＳＫ９出土の遺物を掲載する。

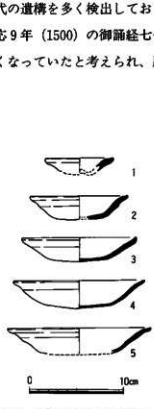


図14　ＳＫ９出土土器実測図
（１～５白色系土器）

7世紀代の土器（図15上段）

この時期の遺物はＳＩ42から出土した（４）の甕を除けば、すべて平安時代の遺構、包含層から出土したものである。

須恵器杯Ｈ蓋（１）　平らな天井部は殆ど調整がなされず小さく突出するような形状を呈する。口縁はやや外反しながら丸く納まる。天井部には「Ｖ」字形のヘラ記号がある。

須恵器杯Ｂ蓋（２）　天井部は欠損する。口縁端部は下方に向き丸く納まる。

須恵器杯Ａ（３）　やや丸みを帯びた底部から体部は外側に真っすぐ延び口縁端部は丸く納まる。

土師器甕（４）　口縁部は外側に大きく開き、端部は上方に突出する。体部の下半部は欠損するが、長胴を呈するものと思われる。体部外面は斜め方向のハケ調整、内面は横ハケののち一部にナデを施す。

8世紀代の土器（図15中段）

この時期の遺物も全体としては少なく、主にＳＤ150（５～９）とその周辺の平安時代の整地層（10～12）からの出土が主である。

土師器杯Ａ（５・６）　底部は平坦で、口縁は内湾気味に立ち上がり上半部は外反する。口縁端部は丸く肥厚する。内面は放射状暗文、底部内面には螺旋状暗文を配する。（６）は内面の底部と口縁との屈曲部に長さ４㎜の刺突痕が存在する。

土師器杯Ｂ（７）　高台は低く断面三角形を呈する。口縁は上半部で強く外反し、口縁端部は丸く肥厚する。口縁内面には放射条暗文、内面底部には螺旋状暗文を配する。

須恵器杯Ｂ（８・９）　高台は小さく内傾する。外側に開く体部の立ち上がりは低く、口縁端部は丸く納まる。

須恵器杯Ｂ蓋（10）　頂部は丸く、縁は緩やかに内傾しながら口縁端部に至る。口縁端部は小さく突出し、断面三角形を呈する。

須恵器杯Ｂ（11・12）　高台はほぼ水平である。体部の開きは小さく、高く立ち上がる。（12）の底部外面には墨書がみられるが、遺存状態が悪く内容不明。

9世紀代の土器（図15下段）

今回の調査で出土した遺物はこの時期のものが最も多く、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器、陶硯などがある。瓦類の出土はほとんど無い。土師器では小片が多く図化できるものは少ないが、杯・皿などの供膳形態よりも甕などの煮沸形態が多いのが特徴的である。また、製塩土器は調査区東側のＳＢ３の周辺から集中して出土しており、ほとんどが小片であるが総数500点以上を数える。

土師器皿Ａ（13）平らな底部から口縁は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は小さく肥厚する。器壁は薄く、調整は底部から口縁まで全体にヘラ削りが行われている。

土師器皿Ａ（14・17～19）内湾気味に立ち上がる口縁は上半部で屈曲し、小さく外反する。口縁端部は小さく上方に突出する。

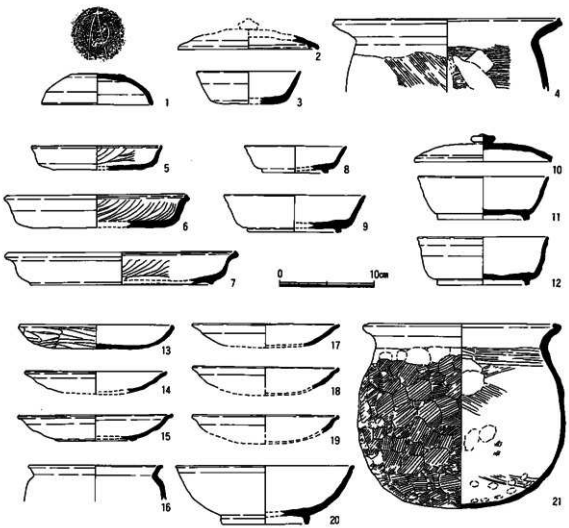


図15　出土土器実測図
平安時代整地層（1～3・10～12・20)、ＳＩ42（4)、ＳＤ50（5～9)、ＳＫ112（14～16)
ＳＫ88（17・21)、ＳＢ３柱穴（13)、ＳＢ５柱穴（18・19)

土師器杯Ｂ（15）　底部には、紐状に退化した高台が付く。体部上半部はやや強く外反する。

灰釉陶器椀（20）　高台の断面は方形に近い三角形を呈し、体部はやや内湾気味に丸みを持って立ち上がり、口縁端部は弱く外反する。灰釉は内面の体部に薄く施釉される。

土師器甕（16）　頸部は「く」の字形に屈曲する。口縁端部は強く外反して平坦面を成す。

土師器甕（21）　底部は小さな平坦面を有し、体部はあまり丸みを持たず寸胴形に立ち上がる。頸部の屈曲は弱く、口縁端部は斜め上方に突出する。外面調整は細かいタタキ調整による。内面はハケの後のナデ調整によるが、一部に当て具の痕跡もみられる。

製塩土器（図16）　500点以上出土した製塩土器は、カマド屋であるＳＢ３の周辺から集中して出土する。形態、製作技法、胎土などの特徴から多種類のものが出土していることがわかる。しかし、ほとんどが小片であり図化できるものが少ないことなどから、今回は土器の厚さ、形態、調整、胎土などの概略の記述にとどめる。

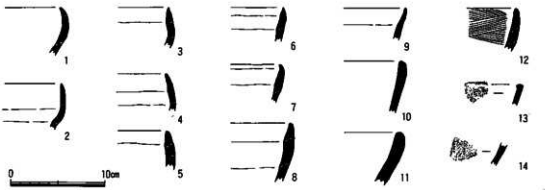


図16　製塩土器口縁断面実測図

厚さでは3㎜、5㎜、6～8㎜、10㎜を超えるものがあり、5㎜と6～8㎜のものが最も多い。口縁の形態は、強くナデ薄く仕上げるものと弱くナデ丸く納めるものがあり、さらに端部は直立して終わるものと内湾して終わるものがそれぞれにある。外面の調整はほとんどが荒いナデ調整によるが、内面の調整は少数であるがハケ目調整によるもの、布目の残るものがある。胎土は砂粒の多いもの少ないものなどがあるが、籾殻を含むものはない。

土器群の様相

今回の調査で出土した遺物では、土師器の供膳形態の土器と煮沸形態の土器の比率が特徴的な点としてあげられる。

ＳＤ150は8世紀中頃の年代が考えられるが、ここから出土する土師器は皿・杯等の供膳形態が170点、甕・鍋等の煮沸形態が84点を数えその比率は67：33となり、供膳形態が煮沸形態よりも多い一般的な傾向を示す。しかし、9世紀代の遺構から出土する土師器は、供膳形態が197点、煮沸形態が535点となりその比率は27：73と逆転する。平安京内の一般的な比率は概ね8：2から9：1程度であり、ここでの比率が特異であることがわかる。[註9] 今回のような傾向を示す例としては、時期は異なるが、北野廃寺第1次調査のＳＤ38から出土した7世紀の土器群があり、寺の厨房に使用された土器であると推定されている。[註10] 今回の調査で出土した多量の甕と製塩土器は、ＳＢ3のカマドの存在からも寺の厨房施設において、多人数の調理を行うに際して使用されたものであろう。

4　ま　と　め

今回の発掘調査の成果として、北野廃寺に関連する奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物群を検出したことは大きな成果である。ここで寺院北辺部における遺構の性格を整理しておきたい。

まず、7世紀後半の第Ⅰ－a期では寺院地の北限は確定されておらず、竪穴住居群が営まれていた。ただ、北野廃寺が7世紀前半に建立されており、その伽藍地の北方に隣接するこれらの竪穴住居群が、一般集落として営まれたとは考えがたい。地方寺院において、伽藍の周辺に寺院に関連する竪穴住居群が営まれる類例は各地で認められ、北野廃寺も例外ではないであろう。[註11] この時期に伽藍地だけでなく明確な寺院地が定められていたかどうかは疑わしいが、寺院と密接に関

係する人々が生活を営んだ場として伽藍地周辺が利用されていた状況を知ることができる。

8世紀にはいると寺院地が明確に定められるようになる。第Ⅰ－b・c期の建物は、寺院地北辺に営まれた付属雑舎に関係するものであろう。これらの経営施設がいかなる性格をもっていたかは明らかでないが、今後の調査において付属雑舎群の建物配置を明らかにしていく必要があろう。北野廃寺では、8世紀前半には寺域南西の付属瓦窯において興福寺式軒瓦を多量に焼成しており、8世紀前半段階に伽藍整備に関係する大きな画期が想定できる。[註12] 8世紀における寺院地の確定や付属雑舎の整備は、興福寺式軒瓦の生産に伴う画期に対応しており、寺院経営が全体的に整備されたことを示唆している。

平安遷都に伴い、北野廃寺は常住寺として再整備される。第Ⅱ－a期のカマドをもつ建物は、寺院地北辺の付属雑舎の性格を示唆している。同様の施設は、長岡京左京四条三坊三町の調査でも検出している。この遺跡は長岡京内に所在した川原寺跡の北西部に想定されており、井戸や板組溝とともに石敷を伴う掘立柱建物が計画的に配置されている。調査の所見ではカマドを伴う掘立柱建物は竈屋であり、川原寺の大衆院関係の遺構を検出したと推定している。[註13] 大衆院は僧侶などの日常の食事調進などを行った施設で、厨・竈屋・大炊屋などの建物が建てられおり、食堂院などを含む場合もあった。[註14] また、寺内の僧侶を統轄する政所院と未分化の場合もあり、『広隆寺資財交替実録帳』「通物章」には政所庁屋の次に厨屋・炊屋・湯屋などが列挙されている。今回検出したＳＢ３は長期間使用されており、遺物の項で明らかにしたように土器の出土状況も食事調進に関わる様相を示していることから、これら大衆院（政所院）の一部を検出したと考えられる。

この地域が僧侶の日常生活に関わる性格を持っていたことは、9世紀後半の第Ⅱ－b期でも同じである。ＳＢ４は南北４間以上の南北棟であるが、３間目に仕切りがある。おそらく、南北に細長い建物となるのであろう。また、ＳＢ５は平面プランがほぼ方形であり、柱直径も他の建物より太いことから、倉のような建物が想定できる。これらの建物群は寺院地北辺の性格を如実に現しており、常住寺の付属雑舎の変遷を部分的ではあるが明らかにできたといえよう。

畿内における古代寺院の研究は、いままで伽藍地の究明に力が注がれていた観があり、寺院地としての付属雑舎の様相はあまり省みられてこなかった。しかし、最近の国分寺の発掘調査成果が示すように、付属雑舎も含めた寺院地の変遷を究明してこそ、古代寺院の具体的な様相を明らかにできる。[註15] 北山背の古代寺院は伽藍地の様相も不明な寺院が多いが、今後の課題として寺院地全体の考古学的解明が必要となろう。

なお、ＳＢ３のカマドについては、帝塚山大学の森郁夫氏に現地でご教示いただいた。文末ながらここに感謝の意を表したい。

註

註1　梅原末治「京都市北野に於ける廃寺阯の発見」『考古学雑誌』26-10　1936年
　　藤沢一夫「山城北野廃寺」『考古学』9-2　1938年

註2　『北野廃寺跡発掘調査報告』　六勝寺研究会　1978年

註3　『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報　平成2年度』　京都市文化観光局　1992年

註4　川井銀之助「常住寺一名野寺址攷」『史迹と美術』58　1935年

註5　福山敏男「野寺の位置について」『史迹と美術』87　1938年

註6　『北野廃寺跡（1979年度）文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』
　　京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所　1980年
　　『平安京跡発掘資料選』（財)京都市埋蔵文化財研究所　1980年

註7　網伸也「広隆寺創建問題に関する考古学的私見」『古代探叢』Ⅳ　早稲田大学出版部　1995年

註8　『北野廃寺発掘調査概報　昭和61年度』　京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所　1987年

註9　平尾政幸『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1990年

註10　ＳＤ38は上・中・下層に分かれ、土師器の供膳形態と煮沸形態の土器の比率はそれぞれで異なるが、全体としては約４：６となり、寺の厨房に使用された土器であると推定されている。
　　堀内明博『北野廃寺』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第７冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1983

註11　北白川廃寺でも推定寺院地の南方に位置する小倉町別当町遺跡で、７世紀後半に営まれた多くの竪穴住居跡を検出している。この竪穴住居群の周辺からは瓦類だけでなく、瓦塔・唐三彩・無文銀銭などの特種な遺物が出土しており、北白川廃寺と何らかの関係をもった集落であることが推定できる。
　　『京都市埋蔵文化財調査概要　平成６年度』（財)京都市埋蔵文化財研究所　1996年

註12　鈴木久男「北野廃寺瓦窯について」『歴史考古学を考える－古代瓦の生産と流通－』
　　帝塚山考古学研究所　1987年

註13　『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和62年度』　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年

註14　竹内理三『奈良時代に於ける寺院経済の研究』　大岡山書店　1932年

註15　付属雑舎も含めた寺院地全体の様相が考古学的に究明されている代表的なものとして、上総国分寺・国分尼寺の調査が挙げられる。とくに上総国分尼寺では、伽藍地北方に広がる講堂尼房等院・政所院（大衆院）・修理院・賤院などの変遷が具体的に明らかにされている。
　　宮本敬一「最近の調査成果から見た上総国分尼寺の伽藍と付属雑院（1）～（4）」『月刊歴史教育』3-9～12　1981年

Ⅲ　岩倉幡枝古窯跡群（元稲荷窯跡隣接地）

1　遺跡の環境と調査の経緯

当遺跡は、史跡栗栖野瓦窯跡、栗栖野６号窯跡などが立地する幡枝丘陵の東斜面の北側に位置し、さらにこの北側には妙満寺前窯跡、妙満寺裏庭窯跡がある。元稲荷窯跡は、この丘陵上においては最も早く開窯し、須恵器と瓦を生産していたとされる。軒丸瓦の笵の一つは宇治隼上り窯跡[註1]と共通するものがあり笵自体の移動が考えられている。また同笵の瓦は、北野廃寺瓦窯跡からの出土[註2]が知られている。

岩倉地域では、７世紀代に入って須恵器生産と瓦生産が相前後して開始される。深泥池窯跡と

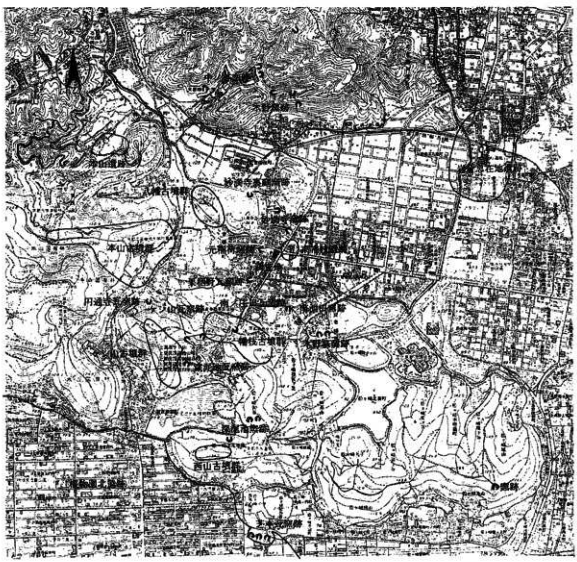


図17　調査地周辺遺跡分布図（1：20,000）

元稲荷窯跡がそれに該当する。深泥池窯跡では瓦生産は確認されておらず、元稲荷窯跡は瓦、須恵器の兼業窯であった。瓦生産は以後、御用谷窯跡（深泥池瓦窯跡）、ケシ山窯跡、木野墓窯跡、栗栖野６号窯跡等での生産が確認されるが、８世紀初頭以降、瓦生産の痕跡はいったん途絶える。

一方須恵器は、７世紀代の幡枝、深泥池周辺を中心とした生産に続いて、岩倉北西部地域の木野を中心とした地区に移動するが、８世紀代に入っても生産が継続される。さらに８世紀末から９世紀初頭に再び幡枝地区で瓦生産が開始されると相前後して、須恵器生産も同地区に移り、施釉陶器生産も始まることとなる。以後、岩倉地区では瓦、須恵器、緑釉陶器、白色土器、など各種の窯業生産活動が活発に行われる。中世前半の様相は明らかではないが、中世後半に入って、いわゆる「かわらけ」(土師器皿）の生産が開始され、近世・近代を通じて京域への供給が活発に行われた。

元稲荷窯跡については、その調査の経緯について「岩倉古窯跡群」(京都大学考古学研究会1992年）に「昭和10年代に井本正三朗が『古式の平瓦片』を採集し、…(略)。1963年になって、国立京都国際会館の建設のため幡枝丘陵の土取り工事が行われた際に、坂東善平から土師器窯発見の報を受けた木村捷三郎らにより、隣接地で窯体が発見されることになる。京都府教育委員会が発掘調査を行い、飛鳥時代の瓦陶兼業窯であることが判明した…(略)。」と詳しく述べられている。

同書によれば地下式の窖窯で、主軸は南北方向と推定され、残存長12m、焼成室の最大幅は1.9m、焼成室の傾斜は25°前後とされ、「床面は当初階段状に削り出していたが、使用を重ねるにしたがい段が摩滅し、後には瓦を積んで段を設けている。燃焼部で６面の操業面が検出され、いずれも瓦と須恵器が出土しており、操業全時期通じて瓦陶兼業であったらしい。…(略）灰原は焚き口付近を除き、調査前に削平され失われていた。また煙出しについては全く不明である。」と記されている。

調査概要の発表は行われたが、詳しい報告はなく、後にごく限られた資料が発表されているにすぎない。出土遺物は京都大学考古学研究室で保管されている。

「京都市遺跡地図台帳」と「岩倉古窯跡群」に掲載されている元稲荷窯跡の位置が若干食い違っている。前者では今回の調査地の北側に位置する事になるが、後者では西側となる。京都大学考古学研究室では遺物以外の資料は預かっていないとのことで、ここでは地形と「岩倉古窯跡群」の写真図版を手がかりに西側の位置を採用した。

坂東善平によって発見された土師器窯については、「古代学研究」(第34号、1963年『京都府幡枝町発見の土師器窯址」坂東善平）に報告がある。窯体そのものが確認されたわけではなく、遺物等の出土状況から推定さるということで、採集した土師器皿の実測図が掲載されている。同氏は、「…鎌倉期を前後するものと考えたい」と述べているが、現在の認識でいえば、その形態的特徴から京都X期(はる)の土師器皿で16世紀代のものである。

遺跡の位置図の掲載は無いが、写真から今回の調査地の北東部分に近い位置と推定される。

図18　調査地位置図（1：5,000）

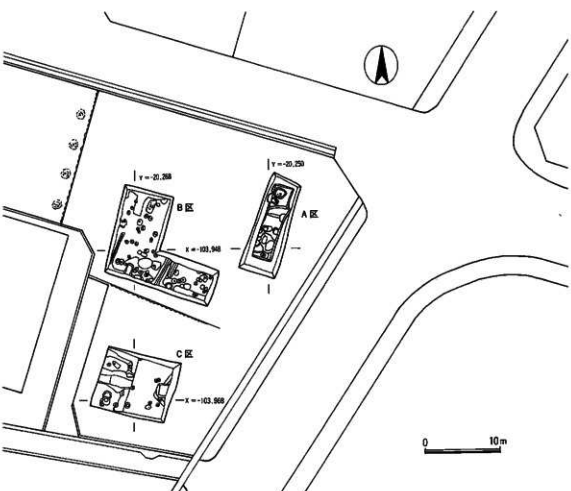


図19　調査区配置図測図（1：500）

2　調査経過

左京区岩倉幡枝町730-6、730-4において店舗建設計画に伴い、京都市埋蔵文化財調査センターが1995年（平成７年）８月、および翌年５月に試掘調査を実施した。建設予定地は「京都市遺跡地図台帳」によると幡枝元稲荷窯跡とされる遺跡範囲の南側部分にあたる。試掘調査の結果、敷地北東部で土師器窯、北西部で建物、南部で灰層とそれぞれ推定される遺構痕跡が確認され、対象地内、あるいはそのごく近辺に新たな窯跡、作業場、土師器焼成窯等の存在が期待された。

今回は敷地北東部に土師器焼成遺構の調査のためにＡ区、北西部～中央部では作業場と思われるピット群の調査のためにＢ区、南部に灰層状のものの調査のためにＣ区の３カ所の調査区をもうけ発掘調査を実施した。Ｂ区は地下埋設物を避けたためにＬ字形の調査区とした。敷地の現状は北西方向に高く南東方向に傾斜して低くなる地勢で、南北44m、北辺が約35m、南辺約15mを測り、中央部に東西方向の段差があり北半部分は約１m程度高い状態であった。調査は1996年（平成８年）10月15日から11月15日までの期間で実施した。

3　遺　構

調査区の北西部（Ｂ区）の一番高い部分では、現表下約1.0m、標高95.5m前後で遺構面を検出した。遺構面は東南方向に緩やかに傾斜し、調査地のほぼ中央部分で西側が高い北東から南西に走る段（比高差約0.7～0.8m）があり、調査区のＣ区東南端では標高約93.8mとなる。この段差を埋める土層には16世紀代の遺物が含まれ、最終的に一部に石組みを有する溝を伴って残存し、完全に平坦化するのは

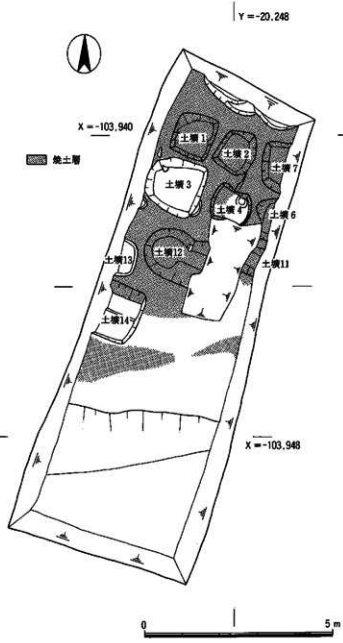


図20　Ａ区　第一面平面実測図

江戸時代に入ってからのことである。この段差がいつ頃形成されたものかは今の所明らかではないが、中世に入って以降の可能性が高い。A区で第一面として調査した遺構面はこの平坦化した部分に形成されたものである。

A区の遺構

A区の堆積状況は、盛土が北部で約0.8m、南部で約1.5mを測る。ついで黄灰色から黄褐色の砂層が厚さ0.2～0.5mで盛土同様、南に厚く堆積する。砂層の直下が第一面で、調査区北半部が焼土層、調査区南半部がよく締まった明黄褐色から黄色の砂層からなる整地層である。焼土層は単一の層ではなく、いくつかの焼土の壁をもつ遺構が切り合ったものである。そのため深浅があり、厚さは一定でない。砂層は0.3～0.4mの厚さで、焼土の壁を持つ遺構は基本的にこの砂層上

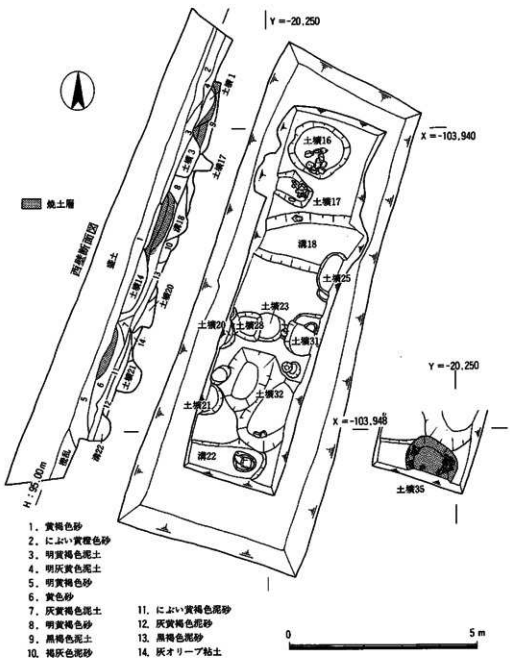


図21　A区　第二面平面・断面実測図

に形成されている。下層は北半部が黒褐色泥土層で、層中に木根・竹根などがみられる腐植土層である。南半部はにぶい黄褐色泥砂層で土師器の小片を若干含む。厚さは0.1～0.3mでやはり南側が厚い。この層を取り除くと、厚さ0.15～0.3mの灰黄褐色からにぶい黄褐色の泥砂層となり、第二面の遺構の多くがこの層で成立する。以下は地山とみられる厚い黄褐色泥砂層で、北西から南東に向かって下がる。黄褐色泥砂層上面はA区中央部付近で標高93.9mを測る。

第一面で検出した遺構は土壙と柱穴状の浅い窪みがある。

土壙は14基検出した。そのうち8基は焼土の壁を持つ方形から長方形の遺構であるが、ほぼ全体の形を知ることができるのは土壙1・2・4の3基に過ぎない。そのうちの土壙1は平面形が約1.2m×1.1m、深さ約0.25mで、緩い傾斜を持った窪みに焼土の混じった黒褐色泥砂層が堆積している。層中から出土した遺物はごく少なく、数片である。各壁面はよく焼き締まっているが、所々に墨流し状の模様を呈する部分があり、そこから剥離しやすいことから一気に焼け堅まった焼土壁でないことが推測できる。また、土壙1などを断ち割って観察を行なった結果、本来の土壙は約2割方大きいこと、平面同様、断面にも縞状の模様がみられることがわかった。

土壙4は約1.1m×0.9m、深さ約0.2mの規模で、土壙1とほぼ同様の状況で検出した遺構である。土壙4のみ南東部の壁面に長さ約45cm、幅約10cm、厚さ約3cmの炭化物層が残っていた。これら8基の遺構は、総じて遺物の出土量がごく少ない。また削平を受け、基底部のみが残余していると思わる。上部構造の解明に繋がる痕跡は認めることができなかった。

第二面で検出した遺構は溝、土壙、柱穴などがある。

土壙16は約1.5m×1.5m、深さ約0.2mの隅丸方形をなす。南部に長辺20～35cmの偏平な石が、平らな面を上部に揃えて敷かれている。石の並べ方は方形を意識しているともとれ、何らかの台座を据える根石の可能性がある。また、平安時代前期の軒丸瓦1点が敷石に転用されていた。

土壙21は約1.1m×0.5m以上で西半部は調査区外に拡がる。深さは0.5mを測る。多量の土師器の皿が出土することから土器溜状の土壙の一つといえる。

土壙23・31は規模、形態、埋土などに類似した点がみられる。土壙23は0.8m×0.8m、深さ0.4mの円形に近い形状を持つ、埋土は暗褐色泥砂層である。土壙31は0.8m×0.7m以上、深さ0.75mの円形に近い形状と考えられる。埋土は暗褐色泥砂層である。両遺構とも壁面が抉れ込んだ、いわゆる袋状をなしている。近接する、土師器が大量に出土した土壙21・25・32と異なり遺物の出土量は少ない。また、土壙23を切る土壙28もこれらと一連の遺構の可能性がある。

土壙25は約1.1m×0.5m以上で東半部は調査区外に拡がる。深さは調査の都合上1mまでの確認に留めた。深い遺構をある期間、廃棄坑に使用していたと考えられ、土師器の皿の破片が炭、焼土とともに、大量にかつ数層に重なり合った状態で出土した。

土壙32は南北の最長部で約2.5m、東西幅は2m以上で東半部は調査区外に拡がる。深さは約0.45mを測る。形状は長方形あるいは長円形をなす2基の土壙からなっているためやや不整形である。土壙内から大量の土師器と共に若干量の焼締め陶器類などが出土した。

土壙35は約1.4m×0.9m以上、深さ約0.3mで長円形をなすと考えられる。埋土は多量に焼土

を含んだ黒褐色砂泥層である。土壙の壁面は全体が薄い焼土層に覆われており、焼土層上面には壁土に類似したスサなどの混じった大小の塊、直径15cm、残存長44cm程の竹などを芯にして粘土を巻き付けた柱状の破片などが散乱していた。いづれも赤く、硬く焼け締まっており何らかの構造物の一部が落ち込んだものと思われる。土壙の中央部は柱穴が切り込んでおり焼土塊などの有無などは不明である。

図22　A区　第二面土壙35

図23　B区　土壙6

B区の遺構（図版4）

検出した遺構面は西半部が高く、段差が付き、東部分で一段低くなる。東部の低くなった部分には16世紀代の遺物を多量に含む黒褐色系の泥土が堆積し平坦化するのはこの時期以降であることが分かる。B区で検出した遺構の大半が16世紀代のものでそれより遡る時期の遺構は確認していない。江戸時代以降の遺構が若干ある。土壙40基、ピット104基、溝5条、撹乱2基、計151基を検出し調査した。中央部から東側部分で土師器皿の集中する遺構（土壙5・11・14・38・41・47・75、溝3・10等）、中央部から北西部分で柱穴と思われるピットが多くみられ、礎石を有するものが32基あった。

土壙5は調査区西側、南壁沿いに検出した遺構で、幅1.2m、長さ1.5m以上、深さは検出面より0.5～0.6mを測る。土師器皿が多量につまり、灰黄褐色泥砂層、焼土などが堆積していた。

土壙6は調査区の中央部で検出した1.3m×2.2mの範囲で焼土塊の集中していた遺構で、掘り込みは薄く、暗灰黄色泥砂層、焼土などが堆積していた。焼土塊はA区土壙35出土のものと類似するもので、その他に被熱痕のある石も2点確認しているが、いずれも原位置を保ったものではない。

土壙11は調査区東で検出、1.1m×0.9m、深さ0.2mの規模で黒褐色泥砂層が堆積する。遺構の東寄りに石6個を検出するが性格は不明。土師器皿が多量に出土した。

土壙14は調査区北端部で検出した。巾0.85m、長さ1.9m、深さ0.25mを測る。底部は平らで、側壁も直に掘り込まれている。上面には大礫が集中していたが、灰黄褐色泥砂層に黄褐色泥砂層が入り交じった土が堆積し、土師器皿の破片が出土した他に施設や埋設物は確認されなかった。

土壙38は土壙6のすぐ西側に検出した遺構で、1.4m×1.3m以上、深さ0.15mを測る。灰黄褐色泥砂層に焼土塊が多く混じる。焼土塊はA区土壙35出土のものと類似するもので、土師器も一定量出土している。

土壙41・47・75、溝3・10は、いずれも調査区東部で検出した遺構でいずれも多量の土師器皿を含む。

柱穴は調査区西側の一段高い部分に集中しているかのようにみえる。並びが確認できるものもある。なかでも土壙6・38周辺は建て替え等の重複もあり複雑に切り合っている。

ここに挙げた遺構群はいずれも16世紀代の土師器皿を伴う遺構で、とりわけ土壙6・38等は土師器焼成に関連する遺構であると思われる。ピット群もそれに関連する建物である可能性が高いものと考えられる。

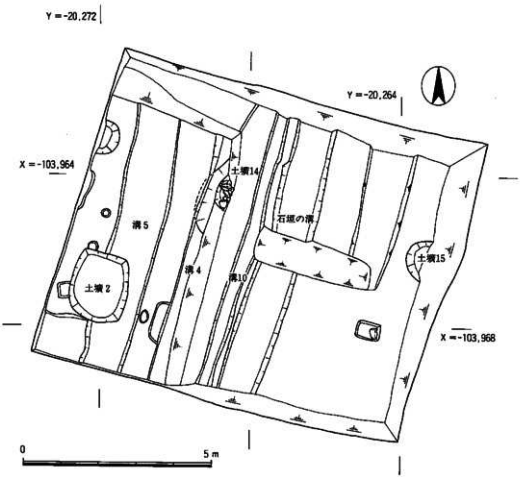


図24　C区　第一面平面実測図

C区の遺構

C区の現況は、試掘調査時には為されていた盛土が取り除かれており、A区・B区を設定した調査対象地北半部とは1mに余る段差がついている。また、雑草の排除を開始した時点で、調査区の西半部は既に近世の遺構面（第一面）に達していることがわかった。第一面は褐色泥砂層で厚さ0.1～0.2mの堆積層である。直下は黄褐色泥砂層の地山で、この面を第二面とした。西半部の黄褐色泥砂層上面の標高は約94.7mを測る。

調査区の中程で検出した南北に走る石垣を境に堆積状況が大きく異なり、東半部では調査開始面から厚さ約0.3mの盛土、厚さ0.25～0.3mの搗き固めたバラス層がある。ついで厚さ約5㎝程の耕作土層、厚さ0.1～0.2m程の旧耕作土層とみられる褐色泥土層となる。直下が竹根・木根などを含むにぶい黄褐色泥土層で、A区・B区の東半部などでみられる腐植土層と同じものである。この層を取り除くと地山の黄褐色泥砂層である。東半部の黄褐色泥砂層の標高は約93.8mを測る。なお、東半部には第一面に相当する堆積層は認められなかった。C区の黄褐色泥砂層はわずかに東下がりの傾向がある。

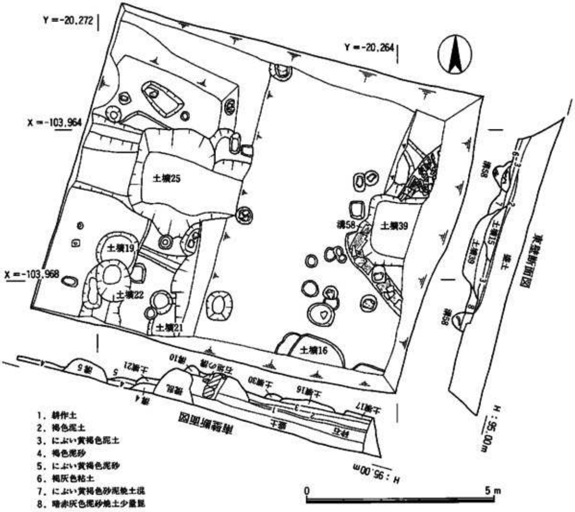


図25　C区　第二面平面・断面実測図

第一面の遺構は溝、土壙、柱穴などがある。大部分を西半部で検出した。

南北の溝5は、幅約1.3m、検出長7m程で南端部は調査区外に延びる。北から南へ傾斜しており深さは北端で約0.1m、南端部で約0.45mを測る。溝の南半部に集中して大量の土師器の皿が出土した、ほとんどが小破片となっており完形品はごく稀である。

土壙14は約1m×0.4m以上で東半部は残存していない。深さ約0.3mの土壙内に長辺15～30cm大の石を使用した一列の石組みがある。石組みの一個に石仏が転用されていた。

第二面の遺構は溝、土壙、柱穴などがある。

土壙22は約1.1m×0.9m、深さ約0.5mで長円形をなす。溝5完掘後に検出した土壙群の一つである、土師器皿などがかなり出土した。

土壙25は約2.5m×4.5m以上で西半部は調査区外に延びる。深さは西端部で約0.65m、東部は若干の下がりがみられ約0.85mを測る。堆積状況は、大きく3層に分けられる。下層の黒褐色砂泥層はかなりの量の炭が混じっていることから、元稲荷瓦窯跡に関連する灰原の一部である可能性も考えた。しかし、灰原であるには包含する灰の量が少なすぎることや出土遺物に瓦が少なく、かつ時代的にそぐわないなどの点がある。

土壙39は約1.9m×1.3m以上で東半部は調査区外に延びる。検出した限りでは長方形にみえる。深さは約0.5mである。埋土は黒褐色泥土層で炭・焼土などを若干含む。

溝58は、幅約0.8m、深さ約0.5mで断面形U字形をなす。北東から南西の傾きを持つ約3.8mの部分と南東へほぼ直角に折れ曲がる約2.3mの部分を調査区の東部で検出した。東半部は調査区外へ延びる。堆積状況は大きく2層に分けられる。上層が黒褐色砂泥層で瓦片をかなり含む。北側の溝の上層は焼土も多く含んでいた。下層が黒褐色から褐灰色の泥砂層で層中に粘土や粗砂のブロックがみられる。溝が特異なのは、土層の境目に凸面を上にした平瓦を蓋のように被せて溝全体に敷き並べていることである。蓋以下の壁面は平瓦の凹面を上にして貼り付けた部分が所々みられるが、壁面全体には貼り付けてはいない。また、溝底には敷かれていない。平瓦の蓋は、2つに割れて落ち込んでいるもの、一方がずれて下がっているものなどがあり、下層が一時期空洞であったことが推測できる。暗渠の一種であろう。土壙39、柱穴57により溝の一部が切られる。

礎石を持つ柱穴はC区では10基検出した。B区で検出した柱穴群と一連のものである。

4 遺 物

土器類

7世紀代の土器類としてC区溝58から出土した須恵器杯身・杯蓋・壺、土師器甕片などがある。土器類は少量で、土師器類の残存状況は悪い。このうち残存状況の良好なものを図示した。

C区溝58（図26） 1・2は須恵器杯身で、底部から体部の立ち上がりの屈曲が強いもので、この型式のものは元稲荷出土の須恵器の中にも認められる。[註4] 3は杯蓋と理解したが杯身の可能性もある。

図26 C区 溝58出土土器

8世紀代の土器類は確認していない。9世紀～12世紀代の土器類はC区土壙25から出土しているが、いずれも残存状況は良くない。Ⅰ期の土器類としては土師器杯・椀・高杯・杯B、須恵器杯B、Ⅱ期では土師器皿、緑釉形須恵器椀、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、Ⅲ期のものでは緑釉陶器椀、土師器皿、Ⅳ期は土師器皿、Ⅴ～Ⅵ期は土師器皿、白色土器皿・高杯・台付椀、輸入陶磁器白磁椀などがある。量的には平安後期のものが多い。13世紀以降から15世紀代に比定できる土器類はきわめて少ない。[註5]

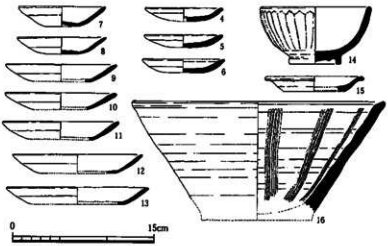


図27　B区　土壙5出土土器

16世紀代の土器類は各調査区で数多く出土している。代表的なものとしてB区土壙5、同土壙75から出土したものを図示した。両資料ともⅩ期中の幅に収まるものと考えている。

B区土壙5（図27）　4～6は土師器皿Sbで口径8.3～8.8cm、器高1.3～1.4cm。7～13は土師器皿Sで、7・8は口径が9.2～9.4cm、器高1.7～2.1cmを測り、圏線径の小さなタイプである。9～13は口径が11.5cm台、12.0cm台、13.5cm台、15.0cm台とあり、破片ではこれらの他に20.0cm台のものも確認できる。この資料では土師器皿Nrが欠落するが、その理由については不明である。[註6] 14～15は瀬戸の灰釉陶器で、14は当時の中国製の青磁を模した椀で、ヘラ描きの蓮弁文が施される。15は皿で、破片が小さいため底部の状況については不明な点がある。16は信楽の擂鉢で、焼き上がりは赤みを帯びるが、完全に焼き締まってはいない。

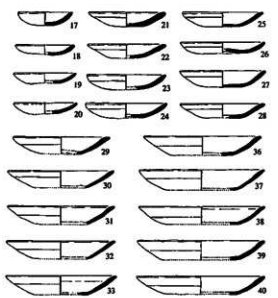


図28　B区　土壙75出土土器

B区土壙75（図28）　出土土器は土師器皿類がほとんどで、他の土器は認められない。17～20は土師器皿Nrで口径が最小のもは5.8cm、最大のもので6.8cmである。器高は1.0～1.4cm。21～28はSbで口径8.2～9.1cm、器高1.3～1.7cmを測る。26については器表の残りが悪く手法痕跡が

確認できず、形態的にⅢSbとするのに問題が残る個体である。29～42は土師器ⅢSとしてくくれるもので、口径は10.0cm台、11.0cm台、11.5cm台、12.0cm台、12.5cm台、13.0cm台、13.5cm台、15.0cm台、16.0cm台のもである。図示したものの他に、14.0cm台、14.5cm台、15.5cm台のものも確認できる。量的な中心は11.5cm～13.5cm台にあり、X期中の幅でも新相を示す傾向がみれる。

16世紀末～17世紀代の土器類はC区溝5や土壙2などC区で多くみられ、A、B区ではごく少量認められるだけでまとまった出土はない。C区土壙2からは17世紀後半代と思われる土器類が出土している。

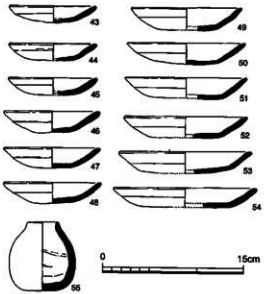


図29　C区　溝5出土土器

C区溝5（図29）　Ⅺ期古に比定できる土器群で、土師器Ⅲ類が多量に出土している。43～45は土師器ⅢSbでロ径9.3～9.5cm、器高1.8cmを測る。46～54は土師器ⅢSで46～48はロ径10.2～10.4cm、器高2.1～2.2cmを測り、圏線径の小さなタイプの系譜上のものである。49～54は11.5cm台、12.5cm台、13.0cm台、14.0cm台、15.0cm台で、このほかに14.5cm台、15.5cm台のものもみられる。この資料でも土師器ⅢNrが欠落する。55は土師器の壷で、これの蓋となる破片も出土している。土師器以外の土器はきわめて少ない。

瓦　類

軒先瓦　C区溝58から軒丸瓦が3点（図30-1～3）、A区土壙16より軒丸瓦が1点（図30-4）、C区土壙25より軒平瓦が1点出土している。1～3は元稲荷瓦窯で生産されたものと思われ、元稲荷a類もしくはb類[註7]に分類されているものである。4は幡枝栗栖野瓦窯で生産された平安時代前期の軒丸瓦で、京域内では緑釉を施したものがよく出土する。この個体については施釉はされていない。5は平安時代後期のもので幡枝栗栖野瓦窯で生産されたものである。

平　瓦（図31～34）　C区溝58の蓋や護岸に利用されていたもので、これも元稲荷瓦窯で生産されたものと思われる。桶巻き作りで、

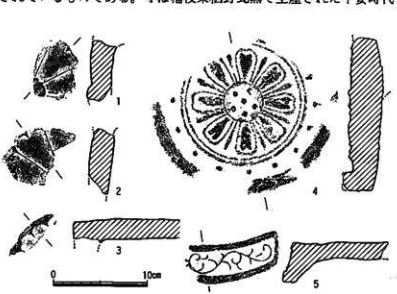


図30　出土軒瓦拓影・実測図

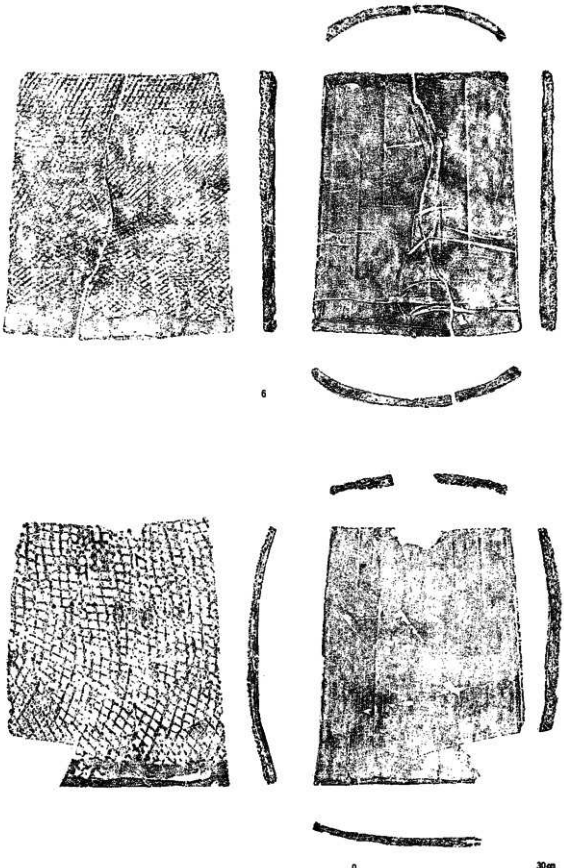


図31　C区　溝58出土平瓦拓影１

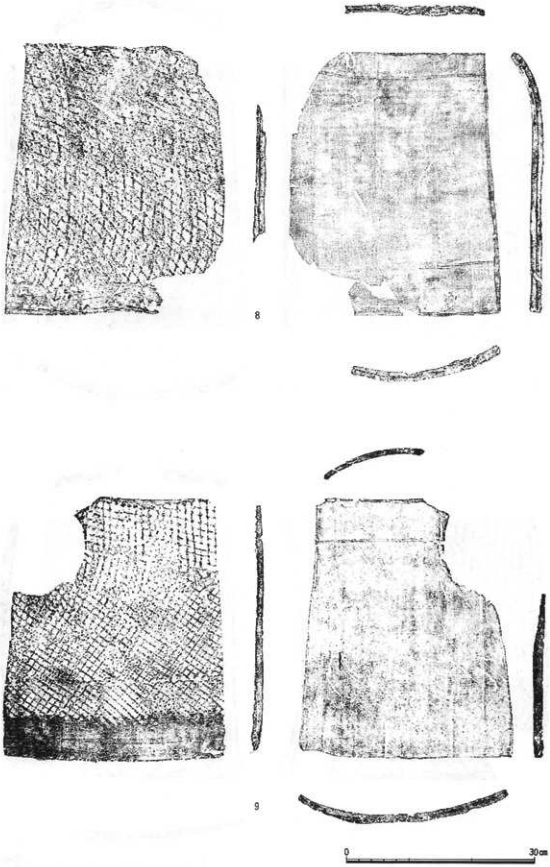


図32　C区　溝58出土平瓦拓影 2

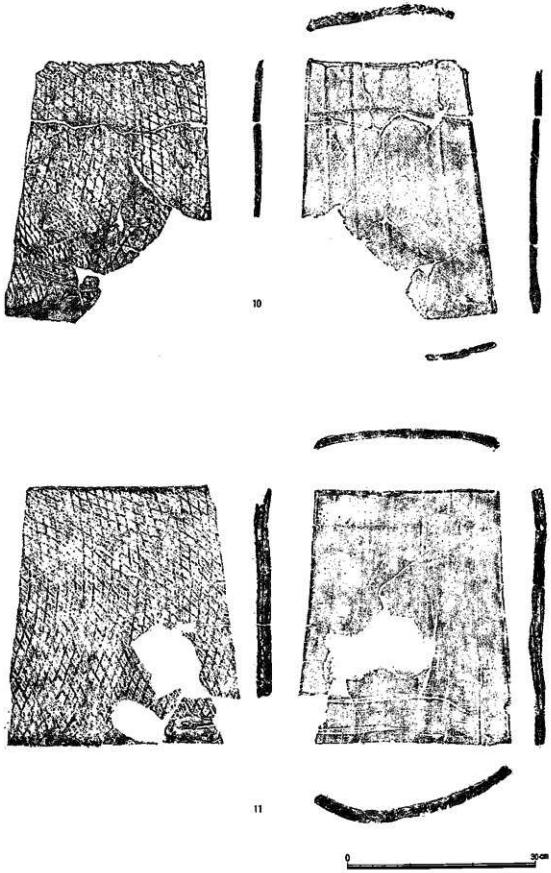
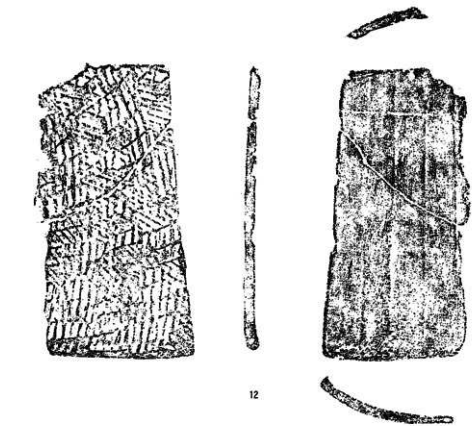


図33　C区　溝58出土平瓦拓影３



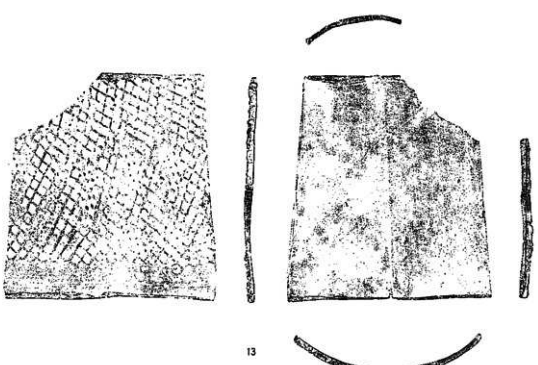


図34　C区　溝58出土平瓦拓影４

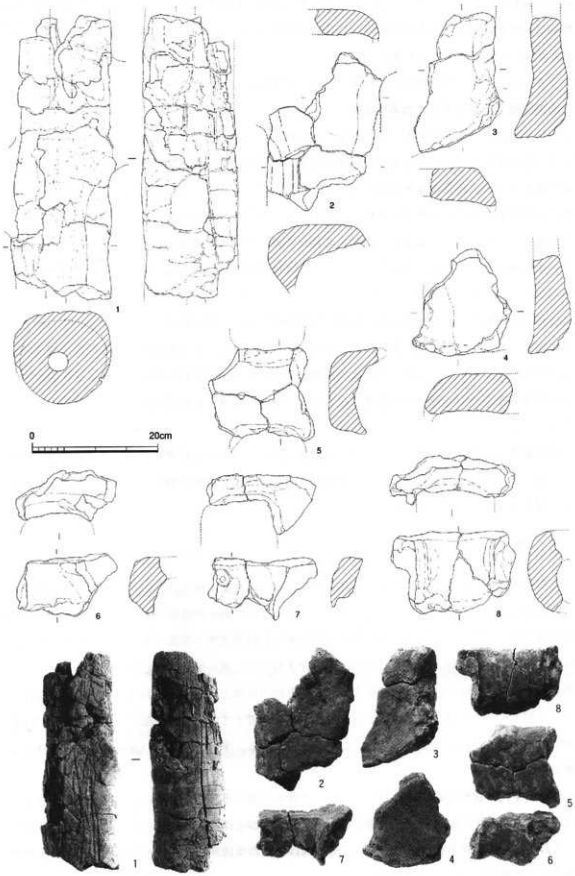


図35　A区　土壙35出土土師器窯の一部と推定される構造物

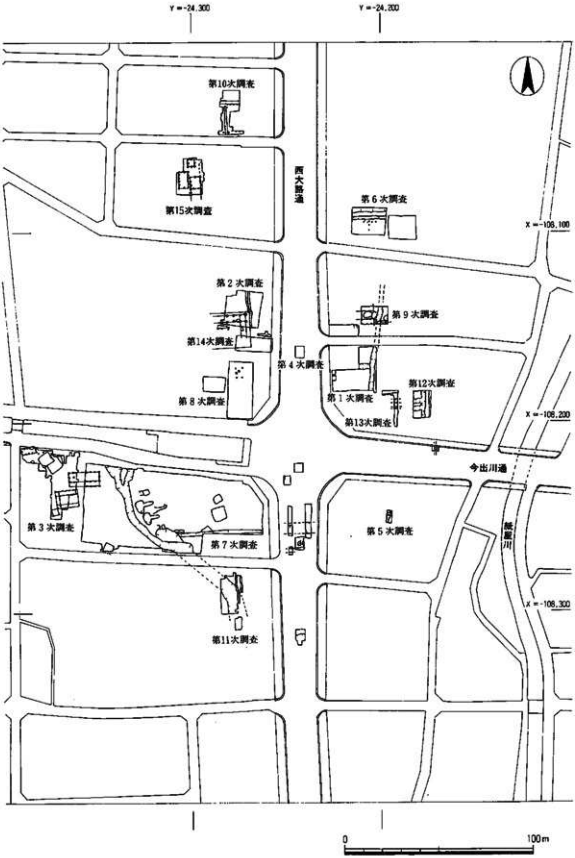
報告書抄録

ふ り が な	きょうとしないいせきほっくつちょうさがいほう
書　　名	京都市内遺跡発掘調査概報　平成８年度
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	網　伸也・上村憲章・清藤玲子・桜井みどり・鈴木廣司・南　孝雄
編 集 機 関	財京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	〒606　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　TEL075-415-0521
発 行 機 関	京都市文化市民局
所　在　地	〒604　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　TEL075-222-3108
発 行 年 月 日	西暦1997年３月31日

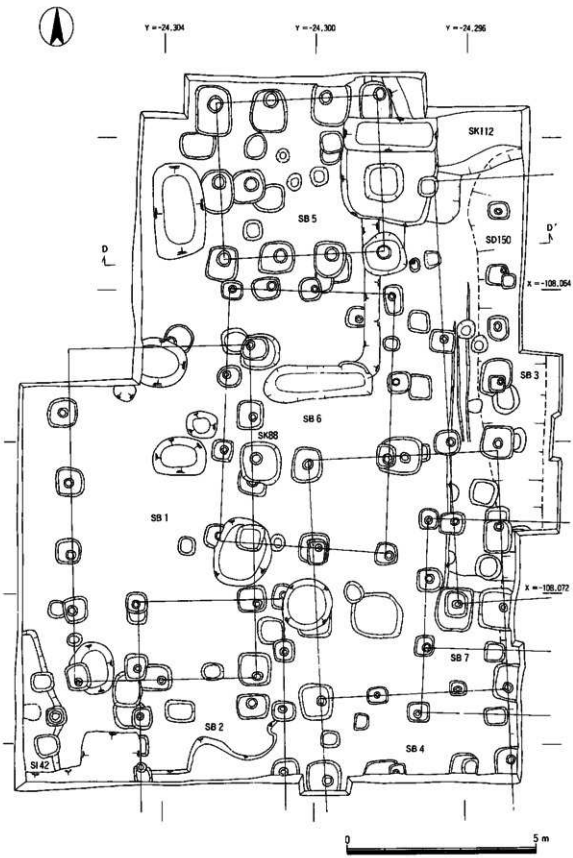
所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　緯	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
鳥羽離宮跡（とばりきゅうあと）第140次	京都府京都市伏見区（きょうとふきょうとしふしみく）竹田浄菩提院町（たけだじょうぼだいいんちょう）78-2	26100		34度56分55秒	135度45分13秒	1995/11/６～12/８	111	倉庫建設
北野廃寺跡（きたのはいじあと）第15次	京都府京都市北区（きょうとふきょうとしきたく）北野紅梅町（きたのこうばいちょう）85	26100		35度１分32秒	135度46分39秒	1996/10/21～11/22	220	事務所共同住宅
岩倉幡枝古墳群（いわくらはたえこふんぐん）（元稲荷宮線関係地）	京都府京都市左京区（きょうとふきょうとしさきょうく）岩倉幡枝町（いわくらはたえちょう）7380-6、730-4	26100		35度３分45秒	135度46分40秒	1996/10/14～11/15	270.5	店舗建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥羽離宮跡第140次	墳墓	平安後期	堀	土師器・瓦類	白河陵墓、堀域の確定
北野廃寺跡第15次	寺院跡	白鳳～室町	掘立柱建物	土師器・須恵器・瓦類	竈屋、製塩土器
岩倉幡枝古墳群群（元稲荷宮線関係地）	窯跡	飛鳥・江戸	掘立柱建物	土師器・瓦類	土師器の窯状遺構（近世）

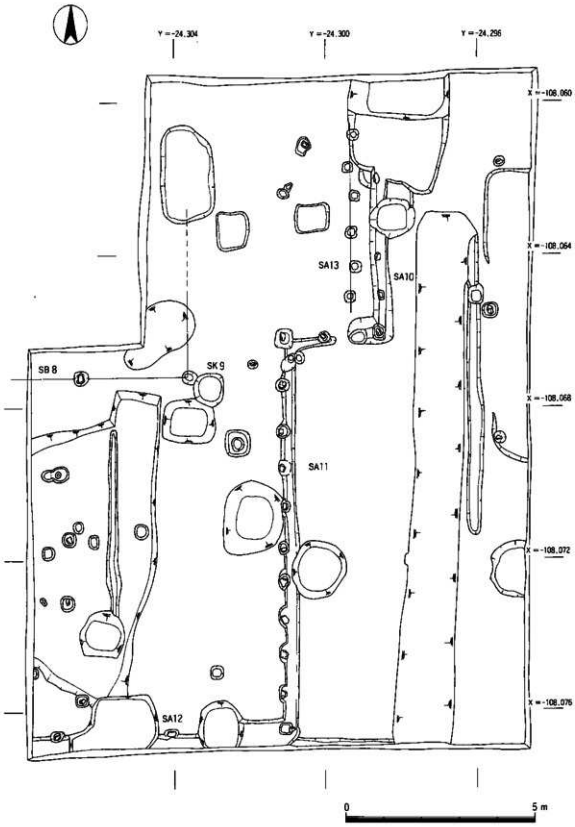
図　　版


Y=-24,300
Y=-24,200
第10次調査
第15次調査
西大路通
第6次調査
X=-106,100
第2次調査
第9次調査
第14次調査
第4次調査
第12次調査
第8次調査
第1次調査
第13次調査
X=-106,200
今出川通
第3次調査
第7次調査
第5次調査
紙屋川
X=-106,300
第11次調査
0
100m

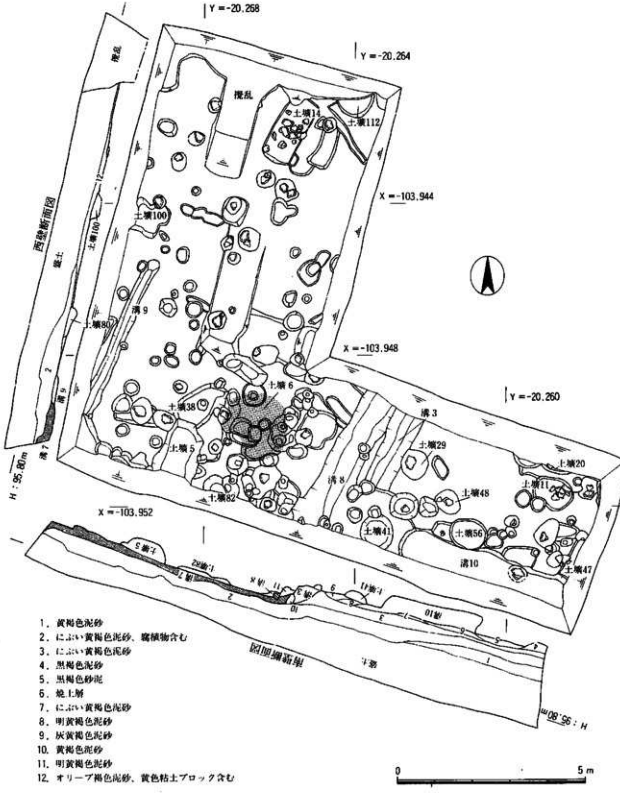
調査地配置図



奈良時代から平安時代遺構平面実測図



室町時代遺構平面実測図



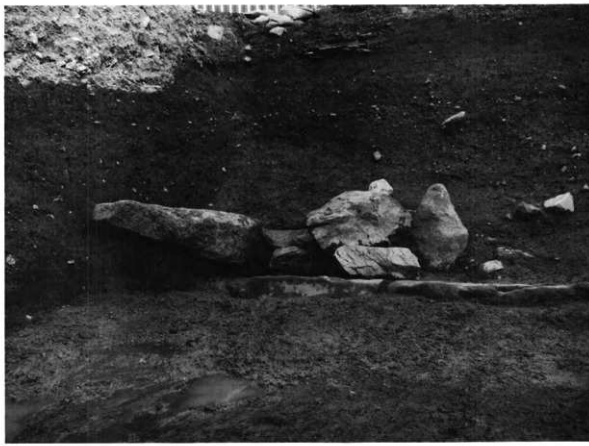
1．黄褐色泥砂
2．にぶい黄褐色泥砂、腐植物含む
3．にぶい黄褐色泥砂
4．黒褐色泥砂
5．黒褐色砂泥
6．焼土層
7．にぶい黄褐色泥砂
8．明黄褐色泥砂
9．灰黄褐色泥砂
10．黄褐色泥砂
11．明黄褐色泥砂
12．オリーブ褐色泥砂、黄色粘土ブロック含む

B区平面・断面実測図

調査区全景（南西から）

1　堀・石垣最下段石列（南西から）

2　堀・石垣最下段石列（西から）



1　堀・石垣２段目石列（南西から）

2　石抜き取り溝　ＳＤ２（南から）

3　五輪塔出土状況（北西から）

1　第91次調査　堀・石垣（北東から）

2　第96次調査　堀・石垣（北西から）

3　第121次調査　堀・石垣（北から）

1　第122次調査　堀・石垣（南から）

2　第122次調査　堀・石垣細部（南西から）

1

3

2

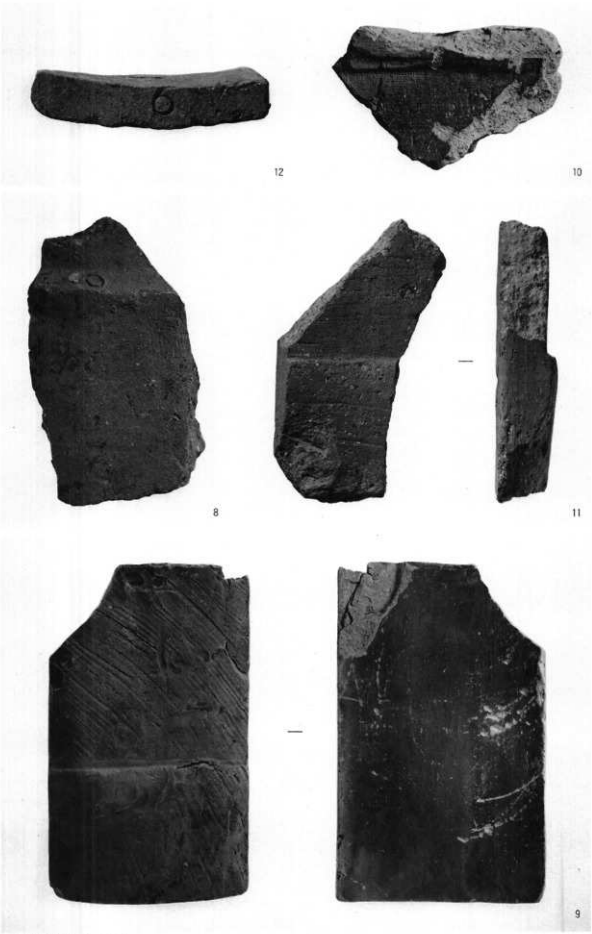
6

4

7

5

出土軒丸瓦、軒平瓦、有段丸瓦



出土有段丸瓦・平瓦

1　奈良時代から平安時代遺構全景（北から）

2　SB3（北西から）

3　SX142（東から）

1　SB4（北西から）

2　SB5（西から）

3　室町時代遺構全景（北東から）

B区全景（北西から）

1　A区　第一面全景（北西から）

2　A区　第二面全景（北から）

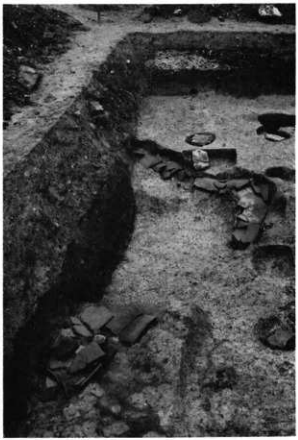
1　C区　第一面全景（北東から）

2　C区　第二面全景（北から）

1　A区　第一面土壙1・2・7（西から）

2　B区　土壙14（北から）

3　C区　第一面溝5（北から）



4　C区　第二面溝52（北西から）

京都市内遺跡発掘調査概報

平成８年度

発行日　平成９年３月31日
発　行　京都市文化市民局
住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編　集　㈶京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
　　ＴＥＬ（075）415-0521
印　刷　真　陽　社